

武蔵坊弁慶

昭和 37 年卒

丹羽 敬忠

実説 武蔵坊弁慶

弁慶が実在したかどうかは疑わしいとする説があるが、実際には、一三〇〇年ころ成立した「吾妻鏡」には、文治元年（一一八五）十一月の項に次のような記述がある。

豫州（義経）すでに西国に赴かんと欲す。（中略）片岡の八郎弘綱、弁慶法師己下相従う
（十一月三日）

豫州に相従うの輩わずか四人、所謂伊豆右衛門の尉、堀の弥太郎、武蔵坊弁慶、並びに
妾女（静）一人なり。（同 六日）

ただこの記述も、他の郎党たちと比べても、弁慶を特にクローズアップしているわけでもなく、その叙述は極めて簡単なものにすぎない。

「吾妻鏡」は、治承四年（一一八〇）から文永三年（一二六六）までの八十七年間、鎌倉幕府の初代将軍源頼朝から第六代将軍宗尊親王までの将軍記を構成した歴史書である。いわば、鎌倉時代の研究の基本資料となっている書である。

成立時期は鎌倉時代末期、一三〇〇年頃であるが、編集者の姿勢には多少のこだわりがある。つまり、源氏三代に対する評価は手厳しいが、編纂当時の権力者である北条得宗家の活躍についてはあえて強調されているという箇所が見受けられる。

また、五摂家の一つ九条家の当主藤原兼実（一一四九～一二〇七）が残した日記に「玉葉（ぎょくよう）—「玉海」ともいわれる」がある。これは兼実が関白や太政大臣を歴任した間の宮中の儀式の次第を詳細に記したもののだが、この中には、弁慶たち家来の名は記されていないものの、義経等が都を脱出する様子を書き留めている。（十一月三日）

去る夜より洛中の貴賤多く以って逃げ隠れる。今晚、九郎等下向するの間、……、同義経（殿上侍臣たり）等、各々身の暇を申し、西海に赴きをはんぬ

確かに弁慶の出自、行動、その生涯などは謎に包まれ、いささか明瞭さを欠くのだが、こういった記述からも、実在の人物であることは疑いないといってよい。

弁慶伝説（「義経記」にみる弁慶）

物語の世界になると、その真意は別にしてかなり具体的になってくる。弁慶の人となり詳しく描写されているのはやはり「義経記」である。それ以前でも、「源平盛衰記」では、にわかには弁慶の活躍場面が多くなる。巻三十六の「三草山（みくさやま）合戦」の件などでは、民家に火をかけて夜道を照らす役割が、「平家物語」では土肥実平であったのを弁慶の仕業としている。続く「老馬」の段でも鶴越（ひよどりごえ）の山道の案内人を探し出すという重要な役が弁慶に振り当てられている。

その風貌についても、「元来色黒長高（いろくろくたけたかき）法師也。身の色より上の装束まで、牛驚く程に有りければ、焼野の鴉（からす）に似たりけり」と、人並み外れた魁偉な者として具体的に描き出されるようになる。

「源平盛衰記」は、軍記物の代表作で、平家物語をもとに増補改修されており、源氏側の加筆、本筋から離れた挿話が多い。平家物語が、語り物として流布したのに対し、読ませることに重点を置いた「読み物」となっている。そのさまざまな説話から、後世の文芸に与えた影響は大きく、国民伝説の宝庫とも言われている。

他にも、室町時代初期に書かれた後崇光院（ごすこういん）の日記「看聞御記（かんもんぎょき）」の永享六年（一四三四）十一月六日の条には、後崇光院のもとから内裏に「武蔵坊弁慶物語」二巻を献上したという記事があり、弁慶を中心にした物語が存在したことを明らかにしている。当時はこの種類の「弁慶物語」が幾種類か流布していたらしく、弁慶の出生や生い立ちについて様々な興味深い伝承が残されている。これらの多くは、義経と弁慶の出会いと主従になるまでの過程を描いて終わる、といった展開で、これらが「義経記」の巻三と密接な関係があったことが推測される。

さて、前にふれたように、武蔵坊弁慶については、「義経記」にその記述が詳しく、現在、彼の出自その他伝えられている生涯の伝説めいた挿話はこの書によるものが多い。

もちろん、この書の主人公は源義経であるが、「義経記」は彼を取り巻く主従（当然弁慶も含まれる）をも描いた軍記物語というところに位置づけられている。この書によって、後世、能や歌舞伎、人形浄瑠璃など多くの芸能・文学作品に影響を与え、今日の義経やその周辺の人物のイメージはこの作品に依っている、と考えられている。

そこでその弁慶像にふれる前に、「義経記」の世界を垣間見てその背景を眺めてみたい。

まず、「義経記」の構造について考えてみる。「義経記」は物語としての面白さを出すために、多くの誇張や強調が見受けられる。そのことは、義経を侍として見たときには、欠陥にも通じる情にもろい性格に書かれているし、弁慶の極端に豪放な描写などからも伺うことができる。

また、時に現実を勝手に作り替えた個所も少なくないと言われ、物語として劇的効果を演出するための工夫とみなすことができる。

物語としての「義経記」は「平家物語」を源流としている。そこから当時の民衆の趣向に合わせて「語り」としての義経伝説が全国各地に創作されている事がうかがえる。それは、時に、地元民衆の要望で琵琶法師が、当時の教養人である僧侶が創作したものもあるだろう。それがリアリティーを付加して物語としての「義経記」が成立したと考えられる。つまり「義経記」は一種の口承文学だといえるのである。

一般にこの作品の成立は、太平記（建徳年間 一三七〇年前後）よりあと、平家物語の成立した承久年間（一二二〇年前後）より、約百五十年後だといわれている。

当時民衆は、平家物語を聞いて義経という人物に興味を示し、その義経描写に飽き足らない民衆がさらに固有の義経物語を志向する。このことが物語としての「義経記」成立の前提に繋がっていると考えられる。従ってこの物語にちりばめられた「判官びいき」の逸話は、当時の民衆の義経に対する思いが反映されたものとみることができる。

つぎに「義経記」の内容について、目次の項目を追いながらふれてみることにする。

（ ）内は「義経記」の本文の項目をそのまま記したものである。

巻一

父義朝の没落（義朝都落の事）から、常盤御前の都落に続いて牛若の幼年期を描いている。牛若は鞍馬寺に預

けられ（牛若鞍馬入の事）で成長する。鞍馬は都人にとっては異界であり、そこで異人としての天狗に剣術や兵法を習った（牛若貴船詣の事）という伝説が生じるのは自然な流れともいえる。この時より牛若は遮那王という名に変えることになった。

やがて、十六歳となった遮那王の前に金売り吉次があらわれ（吉次が奥州物語の事）、彼に導かれて奥州へ下ることになる（遮那王殿鞍馬出の事）。

この巻は全巻の序章であり、多くの牛若伝説を生み出す源となっている。

巻二

吉次に伴われて奥州へ下る途中、熱田の宮に立ち寄る。ここの前の大宮司は父義朝の舅である。遮那王はここで元服し、名も九郎義経と名を変えた（遮那王殿元服の事）。上野国ではふとした機縁で伊勢三郎を家来にし（伊勢三郎義経の臣下に初めて成る事）、平泉に着いた義経は生涯の支援者ともいべき藤原秀衡と対面した（義経秀衡に御対面の事）。そののち、京へ帰る。

「鬼一法眼」の逸話はこの巻に出てくる。

鬼一法眼は一条堀川に住む陰陽師で、天下の兵法書「六韜（りくとう）兵法」を秘蔵していた。義経は、それを見ようとするが許されず、法眼の末娘と契りを交わし、娘のはからで「六韜」を手にいれ、一字も余さず覚えてしまう。法眼は激怒し、妹婿の北白川印池の大將湛海（たんかい）を追手に差し向けたが返り討ちにあってしまう。娘は義経と別れた悲しみのあまり死んでしまい、法眼は悲しみに打ち沈む（義経鬼一法眼が所へ御出での事）。

この挿話は浄瑠璃「鬼一法眼三略巻」となり、のち、歌舞伎にも移入された。

鬼一法眼は園城寺法師との記述もあるが、諸書はこれを陰陽師法師ともしている。その城郭のような邸宅があるという一条堀川は、安倍晴明の橋占いで名高い戻橋に近く、古来陰陽師が多く住んだところで、「鬼一」という名も、鬼の子孫として神をいつく呪術者としての身分を示したものらしい。

ここで登場する法眼の娘の名前は明らかでないが、「御伽草子」の「天狗の内裏」では皆鶴となっている。

いささか横道にそれるが、歌舞伎「鬼一法眼三略巻」について筆を進めることにする。

元々この作品は享保十六年、竹本座で初演された浄瑠璃で、作者は文耕堂、長谷川千四。

五段続きの一、二段目には武蔵坊弁慶の生い立ちが書かれ、五段目に至ってその弁慶が牛若丸に臣従する五条橋の場面がある。ほかに、今でもたびたび舞台上上がっている三段目「今出川菊畑―通称・菊畑」と四段目「一条大蔵譚」がある。「菊畑」は、鬼一法眼と鬼次郎・鬼三太の吉岡三兄弟が敵味方に分かれ、平家の禄を食む鬼一が、兵書の虎の巻を牛若に渡すというくだり、「一条大蔵譚」では、作り阿呆になった一条大蔵卿が平家にくみしながらも源氏に心を寄せる主人公を描いている。この段では、鬼次郎・お京夫婦が登場するが、鬼次郎の妻お京は前名を榎（なぎ）の方といい、弁慶の姉に当たる。また、牛若の母常盤御前も登場している。

この作品に描かれた弁慶にまつわる二段目「書写山本堂の場」と「奥庭の場」についてももう少し詳述してみよう。

「書写山本堂の場」

ここでは弁慶は幼名「鬼若」といって、播州一の霊場である書写山で性慶阿闍梨の下で学問・仏道の修行に励んでいる。年は十三歳だが、酒は飲むし、乱暴狼藉の限りをつくし「身体ばかり大きゅうて」「稚児の行儀は一つもない」小童である。

ある時、領主の播磨の大掾広盛の子息岩千代が入門してくるが、早速いじめにかかる。そんなところへ、鬼若の乳母飛鳥が中風の病をおして鬼次郎、お京を伴ってやって来る。

そこで飛鳥は「逢わず人がいる」と鬼若の姉であるお京を引き合わせる。ここで乳母から、鬼若が熊野本宮の別当弁真が、男の子がないことを嘆き、三所権現（さんじょごんげん）に発願し、ある暁の夢のお告げで母が懐胎し、授かったのが鬼若で、母の胎内には七年いたことが語られる。しかし、その間に弁真は清盛の咎めを受けて死に、鬼若は、母が播磨の大掾広盛の刃にかかったその傷口から生まれたと語る。そんなことから乳母や姉夫婦は鬼若に父母の弔いのため出家することを勧めるが、本人は全くその気がない。

「奥庭の場」

広盛の家来で岩千代を伴ってきた市原団平、飛鳥が持ってきた鬼若の母の形見の薙刀を箱ごと抱えて盗み出し、逃げようとしている。この薙刀は鬼若の父弁真が夢のお告げを聞いたとき枕元に残っていたもので、三条小鍛冶が打ったという銘刀である。

飛鳥と団平はもみ合ううち、飛鳥は押さえつけられ遂には息を引き取る。これを見た鬼若は団平を殺す。乳母の死を悲しんだ鬼若、剃髪することを決意する。

本文に戻ろう。「義経記」では巻二の「義経鬼一法眼が所へ御出の事」において、弁慶はその出生も義経との出会いについても出てこない。すべて巻三に委ねられている。

巻三

「義経記」ではここで初めて弁慶が登場する。最後の二章以外、ほとんどすべてが弁慶の叙述に充てられており、さながら「弁慶物語」ともいうべき様相を呈している。

そこでは弁慶の猛々しい性格が強調され、物語の面白さが加わってくる。義経との出会い、そして主従関係の契約へと続く。

平泉での日々は語られず、急に、兄頼朝が関東において平家追討に立ち上がるどころへ物語は飛ぶ。義経は周囲、特に秀衡の反対も聞かずに頼朝のもとに駆けつける。

「弁慶生まるる事」

ここで、弁慶の超人性を暗示するような異常な出生譚が見える。

「奥歯も向歯も殊に大きに、一口生ひてぞ生まれたる」というその形相は「向歯の殊に差し出でたる」（平家物語）と書かれた義経の相貌と通い合うところがあり、鬼若という弁慶の幼名も、牛若の鬼神化ともみられ、弁慶は義経の分身として、その理想化の裏返しとして形象化とみる説もある。

父別当の妹の庇護によって育てられた鬼若は、やがて比叡山の学頭桜本僧正のもとに預けられ、十八歳のころまでは「山王大師の御宝」と言われるほどに学問に身を入れる。が後一転、悪事と武勇ばかりをこととするようになる。このあたりも「毘沙門の宝」と言われた鞍馬の義経の行状と似通っている。

「源平盛衰記」には鞍馬時代の牛若の振る舞いについて、「只武勇を好て、弓箭、太刀、刀、飛越、力態などして谷峰を走、児共若輩招き集めて、碁、双六、隙なかりければ、師匠も持ちあつかひて過ぐしける程に」と述べている。

叡山出奔を決意した鬼若は、熱田で元服した義経と同じように、一人前の法師になろうと自ら髪をそり、「弁慶」と名乗る。「弁慶」という名は、父「弁せう」の「弁」と、師「くわん慶」の「慶」をとったものである。（弁慶山門を出る事）

比叡の山を出た弁慶は、山はずれの小原の別所にある、かつて山法師が住んでいたという荒れた僧坊に逗留している。しかし間もなく、四国の霊場で修行するため、ふらふらと出て行く。摂津までは船くんだり、兵庫の島を通り、明石からまた船で阿波の国へ、讃岐へ入り、さらには土佐の秦泉寺まで参拝が続いた。

「書写山炎上の事」

こうして弁慶はまた阿波に戻り、そこから播磨へ足を進め、今の姫路市にある著名な道場である広峰山の円教寺（書写山）で夏安居（げあんご）を思いつく。これは、四月十六日から七月十五日までの九十日間、諸国から多くの修行者が集まり、御堂に籠って専心に行を勤める行事である。

弁慶は招かれてもいないのに、何のためらいもなく学頭の僧坊に押しかけ、「比叡山から来た者で、天兒屋根命（あまつこやねのみこと）のご子孫、中関白道隆（なかのかんぱくみちたか）の末裔で、熊野の別当の子」と名乗る。

弁慶は、一夏の間は真心こめて修行し、お勤めにも専心し励む。

書写山の夏行も終わり、秋風が吹くころ、諸国からの修行者も思い思いに帰国していった。弁慶も、暇乞いをするため僧坊に出かけたところ、稚児、大衆たちが酒盛りをしていたので、次の間で昼寝をして待つことにした。

その頃、書写山には信濃坊戒円という悪戯で喧嘩好き者がいた。彼は、弁慶に恥をかかせるため、寝ている弁慶の顔に墨で二行の足駄に事寄せた悪口を書いた。小法師たちはそれを見て笑ったが弁慶には何の事だかわからない。どうもおかしいと思った弁慶は、他の僧坊まで行く途中、水に自分の影を写してみ、初めて様子を知った。

恥をかかされた弁慶に、学頭が何とか穏便に治めようと策を講ずるが、勘忍の限界、信濃坊との騒動が巻き起こる。とうとう喧嘩となり、弁慶は信濃坊をとりさえ踏みつけ、腕先を踏み折り、肋骨を二本折ってしまう。

信濃坊が持っていた燃えさしの櫟（くぬぎ）が投げあげられたまま、講堂の軒に挟まってしまった。折から谷からの風にあおられ、瞬く間に、九間の講堂、七間の廊下、多宝塔、文殊楼、五重の塔が焼け落ちてしまった。

弁慶は、この現世で仏法の仇となる咎を起こしてしまったと、いまさら大衆の数多い僧坊を助けおいたところで何になろう、と書写山南麓の西坂本に駆け下りて、松明の火で軒並み僧坊を焼いてしまった。

こうして書写山を出た弁慶は京都に向かった。

弁慶は院の御所の土堀に上がり、大声で書写山の堂塔、僧坊ともに全焼したことを詫び、かき消すように姿を隠してしまった。院の御所ではこれに不信を抱き、検非違使を使わし学頭を召され、信濃坊戒円の名が挙がった。その結果、「戒円こそ仏法と王法の仇敵」と裁断が下され、信濃坊戒円は厳しい尋問にあい、処刑されてしまった。

「弁慶洛中にて人の太刀を奪ひ取る事」

有名な「弁慶の太刀奪い」のエピソードがここで語られる。古くは逆に、義経の方が不運であった父義朝の弔いのため千人斬りの悲願を立て、それを弁慶が退治しようとして打ち負かされた、という説も散見され、謡曲「橋弁慶」や御伽草子「弁慶物語」もこの伝承を踏まえている。小野小町の百夜通いの逸話などと同じ、九十九伝説（つくもでんせつ）を背景にしたものである。牛若と弁慶の出会いを劇的なものとした巧妙な工夫だといえる。

また、「弁慶物語」では、弁慶が千本の太刀を奪おうと願を立てたのは、書写山再興のため、釘の代金にするためであったとしており、特に、朝恩に誇り悪行の限りをつくす平家の侍に狙いをつけた、としている。

ある時、弁慶は、人の本当の宝は「千」揃えて持つことに気が付いた。例えば、奥州の秀衡は名馬千疋、筑紫の菊池は鎧千領、松浦の大夫は胡籙（やなぐひ）千腰、弓千張、といった類である。太刀を買う金もない弁慶は、夜、京の町に立って人の持っている太刀を奪い取ることを思いつき強奪して歩いた。

数多くの太刀を奪った弁慶は、樋口烏丸の御堂にそれを隠し、その数は実に九百九十九にもなっていた。

その後のある時、弁慶は五条天神に参詣し、大願の成就を祈念した。

明け方近く、堀川小路を下っていくと笛の音が聞こえてきた。身を潜めて待っていると若い人で、白い直垂、その上に胸板を銀で白く光らせた腹巻、黄金づくりの太刀の立派なものを腰に帯びていた。

弁慶はこれを見て、「見事な太刀」と奪うことを考えた。お互い少しも臆さず、弁慶は太刀を抜いてとびかかる。若い人も小太刀を抜いて土塀の前に身構える。一瞬の内に弁慶の胸は踏まれ、持っていた太刀を取り落してしまった。若い人はそれを拾って掛け声とともに、九尺もある土塀の上にゆらり飛び乗ってしまった。弁慶は鬼神に太刀を奪われた心地で、呆然としていた。若い人は御曹司牛若であった。御曹司は土塀の屋根に太刀を押し当てて踏み曲げ弁慶の方に投げてきた。弁慶は曲がった太刀を拾って押し直し、悔しそうに見やって去っていった。

御曹司は鬼一法眼から許されて持つ天下の兵法書、「六韜（りくとう）兵法」を読んで、九尺もある土塀をひと飛び、また飛び戻る離れ業を演じたのである。

弁慶と義経の対決は「義経記」では時、所を替えて三回繰り返されている。一回目はこの五条天神、二回目が清水寺に向かう清水坂、三回目が清水寺の舞台である。いささかくどい描写になっているが、最も深い主従関係の絆を語るための強調であるとみるのが妥当であろう。

「弁慶義経に君臣の契約申す事」

翌日夕、弁慶は昨夜の男が清水にいるに違いないとやってきた。ちょうど夜更け頃、例の笛の音が聞こえてきた。門前で待ちかまえていた弁慶は御曹司に長刀を振り回して斬りかかる。空振りとなったその腕の上を牛若は飛越える。弁慶は仰天、「まるで手に取ったものを失ったようだ」とつぶやく。御曹司も「勇ましいやつ、軽傷を負わせて生け捕りにし、代々の家来に使ってやろう」と思った。

御曹司はその夜、清水寺で通夜をした。後に続いて弁慶もそれについていった。お経を読んでいる御曹司は女房の装束で、被衣（かずき）をかぶっており、最初弁慶は気づかない。それでも、二人一緒に読経し、静まり返った参詣人たちはそれに聴きいった。

暫くして御曹司は「帰る」といったが、どうしても太刀がほしい弁慶は、御曹司にそのことをつけ、武芸で決着をつけることになった。

二人は清水寺の舞台へ飛び降りて戦う。人々も興味深くこれを見物した。双方斬り合いの後、弁慶が打ち損じたところを御曹司が付け入って斬ると、弁慶は左の脇の下に太刀の切っ先を打ちこまれ、思わず気後れし、したたかに打ちすえられた。弁慶は降参した。

その夜の内に御曹司は弁慶を山科に連れて行き、傷の手当てをした。

その後、弁慶を共に京へ出かけては平家の動静を見ていた。こうして弁慶を家来にして以来、弁慶は二度と異心を挟むことなく、あたかも常に身に付き従っている影のように御曹司の身边をはなれず、源氏が平家を三年の間に攻め落とされた時にも、たびたび武功を立て、奥州の衣川での最後の合戦までお供をして、ついに討死を遂げたという武蔵坊弁慶というのはこの法師のことであり、と記している。

都で九郎義経が武蔵坊という勇士を配下に平家を狙っているという噂が立ち、御曹司は、「都での居住が難しくなったので奥州へ下る」と手紙をしたためる。そして東山道へ道を取り、木曾義仲のところに立ち寄って、上野で伊勢三郎のところを経由して平泉へ下って行った。

こうして弁慶を家来にした義経は、密告によって六波羅の探索に遭い、ふたたび奥州へ立ち戻ることになる。

巻四

運命の、兄頼朝と対面を果たす巻である。

ここから軍事の天才義経の華ともいべき平家追討の大活躍が始まるが、その描写は実にあっけない。

「御曹司、寿永三年に上洛して平家を追い落とし、一谷、矢島、壇浦諸所の忠を致し、先駆け身を砕き、終に平家を攻め滅して、云々」、まさに端折っている。そしていきなり義経の運命は反転し、勝者から逃亡者へと早替りする。（義経平家の討手に上り給う事）

腰越での逸話が登場し、腰越状全文を添えて義経の生涯の悲劇性を際立たせると同時に、リアリティーを持たせる効果を発揮することになる。(腰越の申状の事)

義経の逃避行が始まる。

鎌倉勢の刺客として土佐坊が義経を襲撃するが、あっさり撃退する。(土佐坊義経の討手に上る事)

義経はいったん西海に退き、体制を立て直そうと大物浦から船出するが、一度反転した運命は容赦なく義経を討つ。船は難破し、再び都に戻る。(土佐坊義経の討手に上る事、義経都落の事)

前にふれたように、これまでの世を忍ぶ生い立ちとは打って変わり、義経は平家追討の大將軍として公然と歴史の表舞台に登場する。源平争乱での義経の活躍は、生涯の中でも勇ましく華やかで、最も活気に満ちたものといってよい。名将としての資質を示す名高いエピソードを多く残している。また、この時期の義経の行動は歴史資料も多く、史実としても信憑性がある。ただ、「義経記」ではこの武将としての英姿が描かれているのはわずかに、一、二章にすぎない。

「義経記」は戦いに主眼を置いた「軍記文学」というより、一人の英雄の悲劇的生涯の描写であって、伝記的文学としての傾きが強い。むしろ「平家物語」に語られない部分を明らかにすることがこの書の本領であったようである。奥州から馳せ参じ、黄瀬川で頼朝と対面する感動的な場面から一転し、腰越での兄弟対立の冷やかな場面に移るといふ描き方はいかにも対照的で、その没落の悲劇を読者に印象付けている。

巻四では、特に、人形浄瑠璃、歌舞伎でなじみ深い「義経千本櫻」の「堀川館」、「稻荷の森・鳥居前」および、「大物浦」についての叙述が愛好者には興味深い。どんなふうアレンジ、創作されているのか、「義経千本櫻」をここで記してみたい。

「堀川館」

浄瑠璃の本文では、頼朝の名代で川越太郎が三か条の尋問状を持って義経の館へ来ている。そんな矢先、同じく頼朝の命を受けた土佐坊正尊、海野太郎が押し寄せてくる。義経は敵対を避け、ひとまず都を脱出する。それを知らぬ弁慶はひとり奮戦、海野太郎を斬殺し、続いて土佐坊の首を引っこ抜いて大暴れに暴れる。

「稻荷の森・鳥居前」

ようやく伏見稻荷で義経主従に追いついた弁慶だったが、義経は、堀河の館で川越太郎のとりなしにもかかわらず弁慶が鎌倉勢を斬ったことで怒り、打つ。静御前や家来たちが詫びを申し出、気を和らげ義経はこれを許す。それ以前、あとを慕って義経に追いつきお供を願っていた静御前だったが、行く先しれぬ長い旅路に同道は許されず、義経の形見として、後白河法皇から賜った初音の鼓が渡され、追いつがる静を傍らの木に縛りつけて、一行は立ち去る。そこへ土佐坊の家来、かねて静に恋慕していた早見藤太が現れ、静を連れ去ろうとするが、陸奥に帰っていた義経忠臣の佐藤忠信が突然やってきてこれを助ける。この様子を陰で見ていた義経は、褒美として着背長(着替え用の鎧)と源九郎の名を与え、九州目指して大物浦へと急ぐ。

「大物浦」

義経主従は、九州に渡る時期を待って、摂州大物浦の廻船問屋渡海屋銀平のもとで日和を待っていた。主人銀平は、実は、壇ノ浦で死んだはずの平知盛で、乳母典侍の局を妻おりう、安徳天皇を娘お安と偽って暮らしていた。かねて知盛は平家復興を考え、まず、義経一行を討つ計略を立てていたが、すべては義経に見抜かれていた。義経が安徳天皇を守護することを誓うので、典侍の局は自害し、知盛も体に碇綱を巻きつけ海底に沈んでゆく。

この場で、知盛が二度目に出るときの衣裳は、能の「船弁慶」の後ジテに似たこしらえ

(白地の直垂、白の水干、白糸威の胸鎧、銀の立て兜)である。さらにこの時障子屋体をあける前に下座で、謡曲の「船弁慶」が謡われる。

謡曲「船弁慶」

そもそもこれは、桓武天皇九代の後胤、平の知盛幽霊なり。

あら珍しやいかに義経、思ひもよらぬ浦波の

声を知るべに、出で舟の、声を知るべに、出で舟の、知盛が沈みし、その有様に、また義経をも、海に沈めんと、夕波に浮かめる、薙刀取り直し……（中略）、

その時義経、すこしも騒がず、その時義経、すこしも騒がず、打ち物抜き持ち、現の人に、向ふがごとく、言葉を交はし、戦ひ給へば、弁慶押し隔て、打ち物業にて、かなふまじと、数珠さらさらと、押し揉みて……。

この二段目は「船弁慶」に描かれた幽霊の物語を「生きていた知盛」として解釈しているのである。

ここでまた「義経記」に戻ろう。巻四の続きである。

「土佐坊義経の討手に上る事」

頼朝から義経暗殺の命を受けた土佐坊は、熊野詣にこと寄せて上洛した。東当院を行くところで、偶然、義経配下の江田源三に見とがめられる。源三はその下人を巧妙に騙し、上洛の真意を聞き出す。

源三からの急報を聞いた義経は、その当の源三を使いとして土佐坊を呼び出そうとするが、土佐坊は虚病をかまえてその命に従わない。源三に代わって土佐坊の宿所に行ったのは弁慶。有無を言わず引立て、馬に相乗りして強引に連れ帰る。弁慶の荒法師の面目躍如たるものがある場面である。

義経の前に土佐坊は弁明を続け、起請文を書き赦された。しかしその夜、義経は土佐坊一味と奮戦していた。多勢に無勢、あわやという時、土佐坊に不信を抱いていた弁慶があわてて駆けつけてきた。

敗北した土佐坊は、追い詰められて鞍馬の山中に逃げ込むが、ここで地の利を得た判官方の侍たちに捕えられる。死を願う土佐坊に、判官はその覚悟に心を動かされるが、処置を委ねられた弁慶は、即座にその首をはねてしまう。

「義経都落の事」

土佐坊の襲撃を退けた判官は、頼朝追討の院宣を受け、頼朝も、自ら出兵して義経を討とうとする。都人たちは戦いの不安におののくが、結局、判官は兄との対決を避けて都を退去する。

判官は、叔父の備前守行家を伴って十一月三日、都を出立した。

「吾妻鏡」は、義経・行家に従う者として、平大納言時忠の子息前中将時実、義経の同母弟の侍従良成、源三位頼政の孫で義経の婿の伊豆右衛門尉有綱、それに義経の郎党である堀弥太郎景光、佐藤忠信、伊勢三郎、片岡八郎、弁慶法師以下、その勢い二百余騎と書いている。その一行の中に愛妾静が含まれている。

大船に乗った一行が大物の浦の沖で暴風雨にあい遭難する。「吾妻鏡」はこのことを文治元年（1185）十一月二十日の条に記している。「源平盛衰記」はこれを受けて、「折節十一月のことなる上、平家の怨霊や強かりけん、度々船を出しけれども、波風荒うして、大物が浦、住吉浜などにうち上げられて、今は出船に及ばず」として、この難船を平家の怨霊の仕業と結びつけた。これをさらに脚色したものに、先にふれた謡曲「船弁慶」がある。

平家一門の霊は弁慶の祈りによって見事に退散する。が、今度は本物の暴風に遭遇する。難破の危機にも動ぜず、てきぱきと下知を下す判官。その命を受けて必死に風雨と戦う片岡八郎の健闘ぶりが描かれる。

巻五

義経一行の吉野山逃避行を描く。

愛妾静との別れが強調され、佐藤忠信の忠義がクローズアップされる。この巻は「佐藤忠信の巻」ともいうべきものである。

判官主従は、西国落ちに失敗、暫くは大和国（奈良県）の宇陀地方に潜伏する。その後、厳しい追っ手の追及を逃れるため、ひそかに吉野山中に身を隠す。（判官吉野山に入り給ふ事）

苦しい逃避行に女性を伴うことから、静との離別を決意した義経は形見として愛用の鬢の鏡と、由緒ある初音の鼓を与える。中国伝来の秘宝という鼓の由来が語られる。浄瑠璃、歌舞伎の「義経千本櫻」はこの伝説を脚色したものである。この雪の吉野山の別れは浄瑠璃の「道行」を思わせる抒情的な場面である。

「静吉野山に捨てらるる事」

雪中をさまよう静の姿、その哀れな有様を、「義経記」の作者は筆をつくして甘美に、また抒情的に描いている。一昼夜、厳寒の雪中をさ迷い歩いた静は、吉野蔵王権現の御堂にあった。そこで保護された静の自白によって、吉野山中の衆徒たちは蔵王権現の講堂で集会を開き対策を協議する。判官の追討を主張する意見が通り、一山の大衆の蜂起となる。静はさまざまにいたわれ、夜が明けると馬に乗せ、従者の護衛で北白川へと送られる。

「義経吉野山を落ち給ふ事」

同じころ、中院の東谷に潜伏していた判官一行も、衆徒たちの動きを察知して協議を行う。鎌倉方にへつらい、判官一行を討ち取らんとする吉野法師たちの動静を知った弁慶は、急ぎそれを義経に伝えるため、白雪を踏み散らして山中をかける。

「忠信吉野に止まる事」

義経の家来の中で佐藤忠信がいる。一行を無事に吉野から落とすために、義経に申し出て、襲ってくる衆徒たちを待ちかまえ防戦することになった。義経は忠信に愛用の太刀を与える。細やかな主従の愛情を描いた一節である。忠信は最後の願いとして義経の姓名を名乗ることを許しを請う。功名にはやる悪僧たちを引き付けるには、大將軍としての義経の名乗りが必要であった。武士らしく華やかな死を願う忠信の心境があらわれている。

「義経千本櫻」では、伏見稲荷鳥居前の場で、義経は静に初音の鼓、狐の化身である忠信に、静を守護することを依頼すると同時に、彼の着背長を与え、「源九郎」の名を名乗ることを許している。

武士として最後を飾る晴れ戦にいで立つ颯爽とした忠信の姿が描かれる。

「忠信吉野山の合戦の事」

悪僧の張本は川つら法眼だった。先陣を受け攻め寄せてきたが、忠信の策略によって退散、その失敗により、悪僧の頭目横川の禅師覚範が登場する。忠信と覚範の激しい太刀討ちである。はじめは覚範が優勢だったが、形勢は逆転、双方死力を尽くしての雪中での大立ち回りが展開する。遂に覚範は討死する。

義経の身替りになって奮戦し、ただ一人残った忠信、蔵王権現の前で夜を明かし、危ない命を取り留めてやっとの思いで京都に入った。

「義経千本櫻」では、四段目の切「川連法眼館の場」となる。ここでの覚範は、壇ノ浦で死んだはずの能登守平教経で、やはり、平家再興のため義経を討つことを策略している。また、川連法眼は、一山の衆徒の義経追討評議にもかかわらず、鞍馬山の師の御坊以来のよしみから、義経を匿い、彼に味方することになっている。

ここでの弁慶は、吉野衆徒たちの執拗な追跡を才知と機転によって巧みに振り切る。ほかにも、急流を超えかねた老体の根尾十郎を一行のものがかばって川を渡す場面、衆徒の襲撃のとっさの間に、持参したわずかな餅を空腹な主従が分け合う場面など、心温まるエピソードが語られている。

卷六

引き続き忠信の活躍が描かれる。京に潜伏しているところを、なじみの女の裏切りにより、隠れ家を急襲され、大暴れして自刃する。(忠信都へ忍び上る事、忠信最期の事)

その首は直ちに鎌倉の頼朝のもとに送られる。その最期の有様を聞いた頼朝は、忠信の忠義をほめる。(忠信が首鎌倉へ下る事)

その頃都では、義経について様々な放言が飛び交い、東大寺の院主の勧修坊が匿っているとのお話が立つ。そこで頼朝は勧修坊を鎌倉に呼び、尋問する。勧修坊は覚悟を決めて鎌倉に入り、心の丈を頼朝に話す。頼朝はその弁に心を動かされ、鎌倉の寺に迎える。(判官南都へ忍び御出ある事、関東より勧修坊を召さるる事)

吉野山で捕えられた静の動静が描かれる。鎌倉に送られた静は男の子を産むが、その子はあつげなく殺される。その後、鶴ヶ岡で、頼朝夫婦の前で白拍子の舞を見せ、傷心の静は鎌倉を出て京に戻る。この巻の後半は「静の巻」といえる。(静鎌倉へ下る事、静若宮八幡宮へ参詣の事)

「吾妻鏡」によれば、文治二年(一一八六)九月二十二日、洛中で義経の家臣の堀弥太郎と佐藤忠信は追捕の網にかかり、弥太郎は捕えられ、忠信は郎従二人とともに激しく抵抗し、その場で自害を遂げた、とある。

これら三つの物語(忠信物語、勧修坊物語、静物語)はいずれも最後は鎌倉を舞台としており、不思議にも、頼朝が父義朝の供養のために建立した、雪ノ下の大御堂(勝長寿院)に何らかのつながりがある。つまり、壮絶な討死を遂げた忠信の首は勇士としてこの寺の裏に葬られ、召喚を受けながらその弁舌で頼朝を感服させた勧修坊は、この寺の別当として迎えられる。また、頼朝の手で殺された静の赤児もこの寺の後に埋められた、とある。

あとの二つの物語も、いずれも「吾妻鏡」に記されている。

卷七

義経の北陸逃避行ともいうべき巻。

厳しい追及が続き、次々と降りかかる難関を、弁慶の機転で乗り越え、再び秀衡を頼って奥州へ身を隠そうと平泉に入る。牛若時代にたどったコースとは異なり、北陸路をゆく。

有名な「安宅関」もこの巻にある。

「判官北国落の事」

一行は総勢十六人、山伏姿に身をやつし、北の方を稚児に仕立て下る場面が描かれている。

「吾妻鏡」文治三年(一一八七)二月十日の条によれば、

前伊予守義頭(よしあき一義経のこと)日来所々ニ隠レ住、度々追捕使ノ害ヲ遁レ
訖(オワ)ンヌ。遂ニ伊勢・美濃等ノ国ヲ経テ、奥州ニ赴ク。コレ陸奥守秀衡入道ノ
権勢ヲ恃(タノ)ムニ依リテナリ。妻室男女ヲ相具ス。皆姿ヲ山臥并ビ(ナラビ)ニ
児童等ニ仮ルト云々」とあり、彼らが作り山伏となって奥州に下ったという風説は広く知られていた。

義経一行は弁慶を先達として山伏に変装、春まだ浅い北国路を下ってゆく。弁慶は大先達として見事な装束である。つまり、袖の短い浄衣(じょうえ)を着て、濃紺の脛巾(はばき)に草鞋(わらじ)をはいて袴の括り(くくり)紐を膝上高めに結んで、姿よく兜巾をつけた。岩透(いわとおし)という太刀を帯び、腰には法螺貝をつけていた。

弁慶の才覚で、北の方は稚児姿に仕立てられる。丈なす黒髪を断ち切り、唐輪(からわ…髪を頭上に束ねて上を二つに分け輪を作る稚児の髪のかき方)に結び上げ、念入りに稚児装束に装いをこらす。

「大津次郎の事」

商人大津次郎は義経一行の危難を救おうと、一行を待ち構える領主山科左衛門をたばかり、舟を用意して琵琶

湖北岸の海津まで送り届ける。この地の豪商たちが判官に好意的であったことを示すエピソードである。

「愛発山（あらちやま）の事」「三の口（三つの口）の関通り給ふ事」

越前国の地頭敦賀兵衛と、加賀の国の地頭井上左衛門がご命令を受けて愛発、またの名を三の口に関所をかまえ、昼夜各三百人の兵士を置き、警戒している。判官の人相書も出回り、「色も白く、向齒（反っ齒）さし出でなどしたる者」として道を通さない事になっている。

この関所は近江と越前の境にあり、一行がこの関にさしかかった時には、敦賀兵衛は国許に帰っており、井上左衛門はまだ国許から帰っていなかったが、主従は関守たちの強い咎めを受ける。彼等は「羽黒権現の山伏であり、弁慶は羽黒の讃岐坊」と名乗り、年籠りで熊野へ行った帰りであること、判官は大和坊、北の方は出羽国の坂田次郎の若君で金王（こんおう）殿という稚児であると弁明する。鎌倉に問い合わせるまで身柄を拘束されることになるが、弁慶の知識と弁舌、逆手に取った長期滞在の素振りを見せ、兵糧米まで乞いにとって、したり顔で法螺貝を吹いて図々しく祈祷をしてみせる。

一行は無事愛発の関を通過できる。

敦賀の港に出た主従は出羽への船便を求めるが、風雨強く海が荒れていて果たせず、越前の国府（福井県武生市）に出て、そこから平泉寺に詣で、また危難に合う。

「平泉寺御見物の事」

平泉寺の衆徒たちは北の方の稚児姿を怪しみ、これに難題を集中する。

弁慶はこの稚児が笛の名手であることを吹聴し、それを聴くことが所望された。笛は女性の得意事であることで、さらに怪しまれることを懸念した弁慶は、必死の弁明を試み、大和坊の判官が北の方に代わって笛を吹き、その場をやっと取り繕う。

平泉寺を出た判官主従は金津の付近で加賀国の豪族井上左衛門に出会う。その時、判官の笠が激しい風で吹き上げられ、井上は判官の顔を見てしまう。しかし、彼は意外にも丁寧なあいさつに加え、温情を持って見逃される。

一行は安宅の渡り、根上がりの松を見て富樫に着いた。ここに富樫介という資産家がいる。彼が密かに判官殿を待ち受けている、といううわさがあったことから、弁慶はひとりでその館に出向いてゆく。富樫介に弁慶は「東大寺の勧進をする山伏である」と名乗り、寄進を求める。そこで数々の寄進物を受けるが、その品々を「来月の上洛の折まで預ける」といってそこを退出する。

この章は、歌舞伎「勧進帳」、能「安宅」の富樫の原型である。「義経記」が富樫介、能「安宅」が富樫の某というのに対して、歌舞伎「勧進帳」は井上左衛門からとったと思われる富樫左衛門となっている。もっとも、「安宅」の富樫某は、「義経記」の富樫介のような「情も慈悲も深かりける人」ではないようだ。

「如意の渡にて義経を弁慶打ち奉る事」

俱利伽羅峠を越え、加賀から越中へと道をとった一行は、小矢部川の支流に設けられた如意の渡しで四度目の難に合う。「正しくあの客僧こそ判官殿にておはしけれ」と渡し守の権頭（ごんのかみ）に凶星を差され、切羽詰まった弁慶は、義経を舟から引きずりおろし、とっさに情け容赦もなく扇で義経を打擲する。そしてやっとの思いで疑いを晴らすことになる。

渡しを超えた後、弁慶は判官の袖に縋り付いて

「何時まで君を庇ひ申さんとて、現在の御主を打ち奉りつるぞ。天の恐れも恐ろしや。

八幡大菩薩も許し御納受し給へ」とて、さしも猛き弁慶、さめざめと泣きけり。

余の人々も涙を流しけり。

義経も「果報拙き義経に」と弁慶の尽くしたことを涙がこぼれると泣いた、と書いている。

このあたりまでの叙述は謡曲「安宅」、歌舞伎「勸進帳」にも導入され、なじみの場面として現在も上演されている。「勸進帳」は、「義経記」の記述のこの四つを巧みに抄出し、かつアレンジの妙を尽くしていることは明白である。ここにその概略を記してみる。

山伏姿で奥州へ逃避行を続ける義経一行は、如月（陰暦二月）十日の夜、都を発ち、逢坂山を越え、海津の浦から加賀の安宅にやって来る。

安宅には頼朝の命で特別に設けた新関があり、富樫左衛門が警護している。当然のように一行は通行を止められる。弁慶は「おとなしく斬られよう」と最後の祈りを勤める。その態度を見た富樫は態度を和らげ、弁慶が持っているという東大寺勸進のための勸進帳を「読め」と頼む。ありあわせの巻物を出した弁慶、勸進帳と称して堂々と読む。聞き終わった富樫はさらに、山伏の仏道修行について問いただす。これにもよどみなく答えた弁慶に富樫は感服し、布施物を与え、「嵩高（かさだか）の物は帰る時に」と言って弁慶は砂金だけを受け取る。

関を通行しようとする一行に、強力姿の義経が見とがめられる。弁慶はとっさに「思えば憎し」とばかりに、金剛杖で義経を散々に打擲する。双方の詰めよりで、一発触発の危機である。富樫は強力が義経であることを見抜いたのだが、主君を思う弁慶の必死の行動に胸を打たれ、「今は疑い晴れ申した」と言って通行を許可する。

ほっと緊張を解いた一行、義経は、弁慶の行為に感謝する。しかし弁慶は主君を打った恐ろしさにおののき、ひたすら詫び、涙を流す。義経も弁慶の手を取っていたわる。

再び出発しようとするところへ富樫が現れ、お詫びの酒を酌むことを勧める。義経を後ろに隠し、弁慶は盃をかさねる。富樫の所望により弁慶は「延年の舞」を舞う。

舞の途中での弁慶の合図で、一行はそこを急ぎ発ち、弁慶もあとを追いかけて、陸奥へと急ぐのである。

「直江の津にて笈探されし事」

直江津の花園観音堂で、通夜をしていた一行のところへ土地の代官たちが押し寄せ、笈の中身を検分する。神聖な山伏の笈から、櫛や鏡、さらには女物の掛帯（物忌みのしるしに掛ける長紐）などが現れるが、これを言葉巧みに弁慶は言い逃れる。

さらに、兜と脛（すね）当てをいれたもう一挺の笈を探索されようとしたところも、弁慶の威圧によって辛うじて回避された。そのうえ、巧妙な心理的な駆け引きで莫大な金品を脅し取ることになる。

卷八

平泉に入った義経は、すぐ自分の身替りになった継信、忠信兄弟の母と妻子に会い、子供らには名を与えて名付け親となる。（継信兄弟御弔の事）

平泉に戻った義経に、運命の反転は見られず、唯一の理解者であった秀衡が死ぬ。（秀衡死去の事）

義経を中心にまとまれという秀衡の遺言もむなしく、凡庸な嫡子泰衡は、頼朝の脅迫ともいえる威圧に耐えきれず謀反を起こす。（秀衡の子共判官殿に謀反の事）

衣川に義経を襲い、最期を悟った義経は妻子をわが手で殺害し、自刃。その首は鎌倉に送られる。（衣川合戦の事、判官御自害の事）

頼朝は平泉に大軍を送り、攻め滅ぼしてしまう。（秀衡の子共御追討の事）

「義経記」から派生した芸能

「義経記」をはじめとして、「判官もの」の人気は極めて高い。そこから題材をとったり、暗示を受けたりした文芸作品は、室町時代以降において、百数十種に上るといわれる。なかでも最も著しい展開を見せているのは、謡曲、幸若、浄瑠璃など、語り物の芸能で、はっきりこれらは「判官もの」というジャンルに類されている。

現行曲、廃絶曲の区別なしに列举してみる。

謡曲

「鞍馬天狗」「関原与市」「烏帽子折」「熊坂」「湛海（たんかい）」「橋弁慶」「正尊」
「船弁慶」「二人静」「吉野静」「忠信」「愛寿忠信」「鶴岡」「安宅」「接待」「錦戸」「清重」
「衣川」など

幸若舞曲

「伏見常盤」「常盤問答」「笛之巻」「未来記」「鞍馬出」「烏帽子折」「山中常盤」
「麿常盤（なびときわ）」「腰越」「堀川夜討」「四国落」「静」「富樫」「笈探し」
「屋島軍（いくさ）」「岡山」「和泉が城」「清重」「高館」「含状（ふくみじょう）」など

浄瑠璃

古浄瑠璃

「浄瑠璃十二段草子」……浄瑠璃姫と牛若の悲恋を扱ったもの
「たかだち五段」「いずみがじやう」「きよしげ」「吹上秀衡入」など

金平浄瑠璃

「判官吉野合戦」「碁盤忠信」「牛若千人切」「金平本義経記」など

元禄以降の浄瑠璃

「門出八島」「凱陣八島」「源氏烏帽子折」「源氏冷泉節」「孕常盤」「平家女護島」
「末広十二段」「右大将鎌倉実記」「鬼一法眼三略巻」「御所櫻堀川夜討」
「ひらかな盛衰記」「義経千本櫻」「一谷嫩軍記」など

弁慶のキャラクター（歌舞伎、能にみる弁慶像）

「勸進帳」と「安宅」

弁慶については、まず、安宅関にかかる直前、謀議を図るくだりである。

歌舞伎「勸進帳」では、六人の山伏の中で、もともとの中心人物だった義経は、「名もなき者の手に掛らんよりはと、覚悟は疾くに極め」て、潔く死を選ぶことを言う。それに対して亀井、片岡、駿河は武力で関を破ることを主張、常陸坊と弁慶は反対。結果は義経の裁断で、すべてを弁慶に任せることになる。つまり「弁慶よきに

計らひ候へ」である。

ここで弁慶が説得力を持って主導権を握ることになる。これ以降は彼が「先達」となってドラマの中心で活躍していく。

能「安宅」での弁慶は「皆々で談合あらうずるにて候」と言って、子方の義経を、突然強力姿にすることを主張するという作戦、いわば奇知を打ち立てる人物となっている。

対決

弁慶の忠誠人間として、また富樫との知恵比べというべき個所で、いわば、単に弁慶が剛の者というだけでなく、極めて冷静な知略家であることがわかる。

「安宅」では、富樫の「あらむつかしや問答は無益、一人も通し申すまじい上は候」、つまりは全員殺す、ということである。「勸進帳」は弁慶が「さらば最後の勤めをなし、尋常に誅せられうずるにて候」すなわち、「神妙に殺されよう」と逆手に出たのである。

祝詞（ノット）

弁慶はこの場では脅迫じみた呪いをかけているようである。大芝居を打つことになる。

弁慶の自信にあふれたノットは次のとおりである。

それ山伏といっぱ、役の優婆塞の行儀（えんのうばそくのぎやうぎ）を受け……即身即仏の本体を、爰（ここ）にて打留め給はん事、明王の照覧（みやうおうのせうらん）はかり難う、熊野（ゆや）権現の御罰あたらんこと、立所（たちどころ）に於ひて疑ひあるべからず。

意識すれば、山伏は生きながらの仏であり、ここでわれわれを殺すことは、不動明王がどう御覧になるだろうか、不動明王の怒りを買えば、熊野権現も当然怒る。そうなればたちまち罰が来ることになる。

これは脅迫以外の何物でもない、脅しであり呪いでもある。弁慶の人情の機微を鋭く洞察した戦略で、危機一髪、弁慶の勝ちである。このあと富樫は勸進帳の朗読を求めることになる。

前記の「ノット」は「勸進帳」の長唄の詞章であるが、「安宅」ではその中の「……」の部分に次の言葉が入っている。

其の身は不動明王の尊容を象（かた）どり、兜巾（とकिन）といっぱ、五智の宝冠たり、十二因縁の襷（ひだ）をすゑて戴き、九會曼荼羅（くえまんだら）の柿の鈴懸、胎蔵黒色（たいぞうこくしき）の脚半（きゃはん）をはき、さてまた八つ目の草鞋（わらんづ）は、八葉の蓮華を踏まへたり、出で入る息には、阿吽（あうん）の二字を唱えへ

この部分は、歌舞伎の「勸進帳」の「ノット」にはなく、勸進帳読み上げのすぐ後に続く富樫と弁慶の「山伏問答」の前半部分で、山伏の由来、いでたちを問う箇所がすでにここに入っているのである。

勸進帳の読み上げ、山伏問答、富樫の寄進

勸進帳の文句は「安宅」からそっくりとっている。

持ってもいない勸進帳を、偶々持ち合わせていた巻物を勸進帳と称して音吐朗々と読み上げる、富樫にかた時も油断できない緊張した危機的状況である。

「安宅」では、「天も響けと読み上げたり」で、「関の人々肝を消し、恐れをなして通しけり、恐れをなして通しけり」、富樫の「急いで御通り候へ」となって、「勸進帳」にある、後の「山伏問答」はない。「安宅」では「天」にまでも響く勸進帳の読み上げで、富樫ら関守たちは「ノット」に続いて、さらに恐怖に追い詰められた状況を知ることになる。

すでにふれたように、「山伏問答」は、能「安宅」の「ノット」にその「山伏のいわれ」が語られて、そこから歌舞伎に導入されている。後半部分の「真言の秘密」を問う箇所は「安宅」にも見えない、歌舞伎だけの弁慶への問いかけである。

もっともこの「山伏問答」は、五代目海老蔵（七代目團十郎が改名している）が、講談の燕凌（えんりょう）の種本を借りて自分の書き抜きに書き入れたもの、と言われている。

歌舞伎では、このあと、富樫は勸進の施主となって布施物を寄進する。弁慶は、砂金だけを受け取って、残りは帰国の時まで預かることを頼む。ここは「義経記」の富樫介の寄進に呼応している。「安宅」にはこのくだりは見えないが、富樫の畏敬の気持ちと、弁慶のしたたかな抜け目なさが表れているところである。

呼び止め 打擲

「安宅」では「いかに剛力止れとこそ」、「勸進帳」は「いかに、これなる強力、止まり候へ」の違いがある。歌舞伎には気迫が感じられる。

ここでも弁慶の「大ばくち」が炸裂する。呼び止められた義経を打つのだ。その目的は常識の逆を行く、あくまで強力として手ひどく打つことで、義経（主人）として認めないことを相手に示すこと。もう一つは富樫の同情を引くためである。

なおも、「通行は罷りならぬ」という関守たちに対して、一行との衝突は避けられない様相を呈する。「安宅」、「勸進帳」の詞章も

「かほど賤しき剛力に、太刀、刀抜き給ふは、めだれ顔の振舞は、臆病の至りかと十一人の山伏は、打刀抜きかけて勇みかかれる有様は、如何なる天魔鬼神も恐れつべうぞ見えたる」

そのあと、能には見られないが、弁慶の必死の知恵は富樫への「まだこの上にもお疑いの候わば、この強力め、荷物の布施物もろともにお預け申す。いかようにも糾明あれ。ただしこれにて打ち殺し申さんや」の言葉に、「早まり給うな……、今は疑い晴れ候」となる。

当然、富樫が放っておけば、弁慶は強力を殺して自分も死ぬつもりだ、という覚悟に富樫は感動し、強力が義経であることを確信したのだ。そして、同時に富樫も切腹することを覚悟したのである。

「早々御通り候へ」と「安宅」、「疾く疾く誘い通られよ」と歌舞伎は富樫に言わせている。

この場面は「義経記」の「如意の渡し」から出たものである。「如意の渡し」では、弁慶が義経を船から引きずりおろし、扇で打ち据えたことで、渡守の権守は打たれた義経に同情したことが描かれている。ただ、ここでは義経は扇で打たれているが、舞台では金剛杖である。これは「如意の渡し」で平権守は自分が杖で打ったのも同じだ、と言っていることから、扇が杖をイメージしたものと考えられる。

弁慶の詫び、義経のなぐさめ、回想

ここは関所から離れた場所になる。「安宅」は弁慶が「先の関所ははや抜群に程隔たりて候間、暫く此處に御休みあらうずるにて候」と言っている。歌舞伎にここはない。更に、「安宅」では弁慶の詫び言葉が入る。

「いかに申しあげ候。只今は余りに難儀に候ひし程に、不思議の働き仕（つかまつ）り候事、これと申すに、わが君の御果報拙く（つたなく）ならせ給ふにより、今弁慶が杖にも当たらせ給ふかと存じ候へば、返すがえすあさましうこそ候へ」

歌舞伎では、いきなり義経の、「いかに弁慶……」以下、「先の今日の機転は、まさに天の加護、弓矢正八幡の神護」、と赦しとなぐさめの言葉を言っている。そして四天王の称赞に続いて弁慶の詫びとなる。

歌舞伎「それ世は末世に及ぶと言えども、日月未だ地に落ち給わぬ御高運有り難し……」

能 「それ世は末世に及ぶと言えども、日月は未だ地に墜ち給わず、たとひいかなる

方便なりとも、まさしき主君を打つ杖の天罰に当たらぬ事やあるべき」

「安宅」と「勸進帳」の違いがここにある。

能は、日月未だ地に落ちていないから、私は天罰を受けるであろう。と言っているのに対し、歌舞伎は、日月未だ地に落ちていないからこそ義経を助けることが出来たという。

歌舞伎はこの後、「ついに泣かぬ弁慶も、一期の涙ぞ殊勝なる」。「判官御手を取り給ひ」となる。

能には無論このくぐりは見当たらない。それに代わって

「げにや現在の果を見て、過去未来を知るといふ事、今に知られて身の上に、憂き年月の二月（きさらぎ）や、下（しも）の十日の今日の難を遁（のが）れつるこそ不思議なれ。唯さながらに十余人、夢の覚めたる心ちして、互に面（おもて）を合はせつつ、泣くばかりなる有様かな」

ここは、義経一行の、過酷な運命に流されてゆく、ある意味で、そんな運命への無常観のほとぼしる個所で、歌舞伎の、男泣きの弁慶に義経がその手を取って慰めの言葉をかける、いわば、人間らしい感情の発路というべきところとは、両者が解釈を異にしているところである。

弁慶と義経は、華々しかった戦績を語る。

能では「……、敵を滅ぼし靡（なび）く世の、其の忠勤も徒（いたづら）になり果つる此の身、そも何といへる因果ぞや。……、唯、世には神も佛もましまさぬかや、恨めしの浮世や、あら、恨めしの浮世や」

と、ここでも世の無常を述べている。

富樫の二度目の出、酒宴

富樫が一行を追いかけて「あまりにご面目もなく候ふとて」と、失礼をしたことに詫びの積りで登場、酒宴になる。

長唄の詞章

げにげにこれも心得たり、人の情の杯を 受けて心をとどむとかや

今は昔の語り草、あら恥ずかしのわが心

一度まみえし女さへ、迷ひの道の関越えて、今また爰（ここ）に越えかぬる

人目の関のやるせなや、ああ、悟られぬ浮世なれ

能では最初の詞章が違って来る。

「受けて心をとどむとかや」は「受けて心を取らんとや」と、酒によって自白させようとする策略だと言っている。長唄はそうではない。富樫の情がはっきりしているのだから、心を許し、素直に杯を取るつもりである。能では、まだ緊張感が解けず、危機感を持ったままの酒宴となる。現にすぐそのあと「怪しめらるな面々」という詞章が出てくる。

「今は昔の……」以下は「安宅」にはない、「勸進帳」の創作である。弁慶の人生の回顧となる。

女への煩惱から、男女の間の越えてはならない障害である関、「人目」、つまり世間が見る視線という関があるのと同じように、富樫の関も、自分たちに向けられた疑惑という視線の関を越えようとして、なかなか越えられないやるせなさ、たまらなさ、それは人生の旅路と同じだ、というのである。

以上、この戯曲をみても、弁慶には人間として特徴のいくつかを見ることが出来る。厳しくかつ冷静であり現実的な戦略家としての弁慶、とっさの機会をとらえ、それに対して大胆に賭ける行動する弁慶、そして一期の涙さえ見せる情熱を持つ弁慶、さらには、煩惱にも煩わされる人間としての弁慶、彼にはこんな魅力がある。

この節こそが、この演目に描かれた弁慶の本当の姿を見ることが出来る重要な個所であるといつてよい。

「義経千本桜」

人形浄瑠璃、歌舞伎ではすっかり人気の演目である「義経千本桜」は延享四年十一月、浄瑠璃として竹本座で初演された。作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳で、三人の合作である。これは知られているように、「義経」と冠されてはいるものの、主役となるのは源九郎狐、平知盛、いがみの権太であり、歴史上では死んだはずの平家の武将、知盛、維盛、教経が、実は生きていた、という設定でストーリーが展開されている。

もちろん、そこかしこで義経は登場するし、それに伴って弁慶もそれに加わる。

「義経記」の記述で概略は前にふれているので、ここでは弁慶の取り上げられている箇所についてのみ記すことにしたい。

「大序」大内の場

義経が後白河法皇をたずねて院に向かう。弁慶が同道している。本文は

供の饒（かざり）は三国一西塔の武蔵坊弁慶。大紋の袖立烏帽子僧衣（そうえ）をはばかりいでたちは、実にも勇々しく見えにける。

と叙述している。

近侍する左大将藤原朝方は頼朝・義経兄弟の不和に付け入って、法皇から義経に賜った「初音の鼓」をなぞらえて、鼓を打て（頼朝を討て）、と迫る。これを、義に厚い義経は断る。朝方は院宣と偽り強制する。

また弁慶は、「ここぞ」とばかり口をはさむ。

「コレサ左大将とやら、王様は天下の鑑、無理言はっしゃれば天下中が、皆無理言うが合点か。無理があるなら傍にいる公家の役でなぜしづめぬ。大敵にもひるまぬ大将よう一言でやりこめたなァ、言い負けさせては個の腹の虫が堪忍せぬ。サア、出直して謝りや」、と腹立つままの傍若無人

弁慶は義経にいらまれ、「やをれ弁慶、高位高官に対しての悪口、最前よりの無礼のだんだん言語道断そたちされ、我が目通りへは叶わず」ともってのほかのご立腹に、詮方なく引き下がる。

堀川御所の場

二条堀川の御所に帰った義経は駿河次郎、亀井六郎などをはべらせ、正妻卿の君の慰みに、静御前の舞を楽しむ。ご機嫌の卿の君に、静は、「大内での失態に、弁慶は自分の楽屋へ来て、泣いて頼んできた。気の細い人でいじらしい弁慶、何とか主君のご機嫌が直るようとりなしてほしい」と依頼する。

傍で聞いていた駿河は「じたいあの七つ道具が大きな邪魔……」と、負けず亀井も「イヤまだ七つ道具は御普請の役にもたつが、難儀なものはあの太刀、柄も四尺、刃も四尺、八尺の物を振り回すによって、そばあたりの鼻がたまらぬ」と混ぜ返す。御台も静も笑いをこらえ、お詫びをとりなすのだった。義経も「性懲りもなき坊主め、きっと意見し、重ねて荒気を出さぬよう」と気を静める。

弁慶は「七尺の体も三尺八九寸、四尺に余る太刀をひきずらして」這い出で、腰元どもの「さりとは片意地な坊様……」に「人にはあるぞよ」と眼玉を見まわす弁慶、「アレまた睨まれます」と腰元連。その様子が手に取るように描かれている。静のとりなしに、卿の君は

「しとやかに、君は船なり臣は水、浪立つ時はおのづから君のお船を覆す。家来の業と

て言訳ないぞ。重ねてきつと荒気をやめ、おとなしうなったらよかろう」
と子供を諭すような意見に弁慶は揉み手をして「アイアイ」というのみだった。

このところの弁慶は見てきたように、暴れん坊の無邪気な子供と同じく、親に諭され、「シュン」となる餓鬼大将の様子が見られる。

頼朝の名代として川越太郎が堀川御所にやってきて、義経の行動に対して「三か条の不審」をただす。卿の君の自害によって一旦はこの事態も解決に向かったかに見えたが。

この時すでに鎌倉方の土佐坊正尊や海野太郎が館へ押し寄せ、乱戦となる。静も自ら太刀をとって防戦にかけ出る。

弁慶は義経の懸念にもかかわらず、関の声を聴くや否や、「この時とばかり」悦び勇んで出ていく。味方を制して矢を射り追いかえず算段のところ、弁慶は、げんのう、大鋸で人を引切り、大将海野太郎を討ち取ってしまった。これを聞いた義経は、あくまで兄頼朝との争いを避けようとしたものの、にもかかわらず、弁慶の早とちりも手伝って、和睦の願いもかなわず、やむをえず悔し涙とともに都落ちを決意して駿河、亀井を共に館を離れる。

義経の苦境を知らぬ弁慶は、怪力をもって土佐坊を生け捕りにしてしまう。雑兵どもの首とともに「芋洗い」を演じ、寄せ手の肝をつぶし、義経を追って悠々と去ってゆく。

伏見稻荷鳥居前

落人となった義経一行、伏見稻荷の鳥居前まで来たところ、一行を静が追ってきた。「同道できぬ」と理を尽くして説得するが、静はなかなかあきらめない。

そこへ同じく弁慶も後れを取りながら、ねじり鉢巻き鉄棒片手に追いつき「討手の土佐坊たちを見事仕舞うてのけた」と意気揚々と報告する。だが、義経は自分の扇で散々に打ち据える。

院宣の鼓も、郷の君の自害も、兄頼朝との和平のみを考えて堪えてきた義経の苦心が、弁慶の乱暴で水の泡となったためである。

弁慶は返す言葉もなく、頭も上げず、自分のとった行為は、まさに御所の討手としてやってきた土佐坊、主君を狙うことを見過ごすわけにはいかなかった、とついいは泣かぬ弁慶も足しない涙をこぼすのだった。

本文は

「……さある時は日本に忠義の武士は絶果てなん。誤りならば幾重にもお詫び言つかまつらん。いかにご家来なればとて、余りむごい叱りやう、これといふも我君の漂泊よりおこってこと、無念々々」と拳を握り、終に泣かぬ弁慶が、足しない涙をこぼせしは、忠義故とぞしられける。

ここで思い出してほしい。前にふれた「勸進帳」の長唄の詞章である。

ついに泣かぬ弁慶も一期の涙ぞ殊勝なり。

同じように「涙」をこぼす弁慶だが、「勸進帳」の涙は、主君を打擲してまでも何とか難局を乗り越えた勇気と機転、そしてその奥に秘めた忠義を示したことに対して義経が感謝とねぎらいの意を表したものであって、弁慶はその厚意に感動し、思わず流した嬉しさの「涙」である。

一方、この演目のこの場面は、忠義のため、という根本は変わらないにせよ、弁慶のとった出過ぎたともいえる行動によって主君を追いつめ、あまつさえ、義経に都落ちを余儀なくさせたことに対しての反省と悔恨の「涙」なのである。

思えば、弁慶は感情の起伏も激しく、ふだん「泣かない弁慶」がついいは涙して「泣く」場面はほかの演目に

もみられる。

後ほどの項でふれるが、「御所櫻堀川夜討」の三段目切「弁慶上使」がそれである。ここでは、生涯たった一度の契りで生まれた我が子を犠牲にした悲しみを、「産声のほかに泣かなかった」という弁慶が、三十余年溜めてきた涙を一気に溢れさせて、大泣きに泣く場面がある。これは、ずばり、悲しみの「涙」である。

静、亀井、駿河の詫び言で義経も面を和らげ「母の病気で故郷へ帰っている佐藤忠信がいればその詫び言は聞かないが、この行く先は敵ばかり、一人でも郎党がほしい」からと、許すのであった。

ここまでの武蔵坊弁慶、忠義に厚いことは人後に落ちないが、ややもすれば単純で、無鉄砲で、それらが行き過ぎたことで主君の勘気を受けるという人物に描かれている。しかし、愛すべき邪気のない性格は、静、郷の君にも好かれ、度々の失態も、彼女たちの詫び言によって失地回復している。

渡海屋・大物浦

落人となった義経主従は九州への日和待ちで、瀬戸内の海運を一手に引き受ける廻船問屋の渡海屋、奥の一間に身を潜め、逗留している。

障子の内から弁慶が、旅の僧のなりで出てくる。そして、店の間で寝入っているこの家の娘・お安の頭を跨ぎかけ、急に足をすくませてしまう。弁慶は一瞬、不審に思う。

実はこのお安、ほかならぬ安徳天皇で、渡海屋の主人銀平こそ壇ノ浦で死んだはずの平家の武将平知盛、その女房に姿を変えているのが天皇の乳母典侍の局である。知盛は、平家を討ち滅ぼした義経に報復し、ここでその仇を討つためにこうして仮の姿に身をやつし、一門の再興めざし機会を狙っていたのである。

義経一行を本船に乗せるため手船に案内させたのち、さて、銀平は正体を顕わす。

そもそも是は桓武天皇九代の後胤、平知盛幽霊なり。……、君は正しく八十一代の帝、安徳天皇にて渡らせ給へど、源氏に世をせばめられ、所詮勝つべき軍ならねば、玉体は二位の尼抱き奉り、知盛もろとも海底に沈みしと嘆き、それがし供奉してこの年月、お乳の人を女房といひ、一天の君をわが子と呼び、時節を待ちし甲斐あつて、九郎太夫義経を今宵の中に討ち取り、年来の本望を達せんは、ハア、悦ばしや嬉しやな…。

能「船弁慶」の謡の下座とともにこういったセリフが聞かれる。

しかし、義経はすでにこの事実を掌握しており、知盛の計略は失敗に終わる。

この場面の冒頭、弁慶が寝ている娘を跨いだ時、にわかに足がしびれたことから、義経は、「われ、この家に逗留せしより、並々ならぬ人相骨柄、さッするところ平家の落人…」と弁慶に言い含めて帝を探らせた、という。この時から、すでに、知盛の手立てをはかり知って、手船の船頭を海へ切り込んで、裏海へ船を廻して上陸したのだった。

典侍の局は自害し、義経は安徳天皇を保護する。

満身創痕の知盛に、弁慶は数珠をサラサラと押しもんで「もはや悪念発起せよ」とその数珠を投げかけたが、知盛は「出家とな、エ、けがらわしい」と、無念の顔色、眼は血走り、髪は逆立ち、悪霊の相をあらわす形相であった。

本文は、

「そもそも四姓始まって、討てば討たれ、討たれて討つは源平のならひ、生かはり死にかはり、恨みをなさで置くべきか」と、思ひ込んだる無念の顔色、眼血走り髪逆立ちこの世からの悪霊の相を顕わすばかりなり。

ここで、興味深い本文の叙述に遭遇することが出来る。知盛は、

「是といふも父清盛、外戚の望み有るによって、姫宮を御男宮といひふらし、権威をもって御位につけ、天道をあざむき、天照大神に偽り申せし其の悪逆、積もり積もりて一門わが子の身にむくうたか、是非もなや……」

安徳天皇は女帝だったのである。

知盛は「只今此の海に沈んで末代に名を残さん。大物の沖にて判官に、仇をなせしは知盛が怨霊なりと伝えよや」とつづけ、大碇を体に巻きつけて海の底に沈んでいく。

この場の弁慶は宗教家ともいうべき、落ち着きもあり、冷静沈着、しかも主君に忠実な家来として描かれていることを付記したい。

舞踊劇「船弁慶」

この舞踊劇は、前項、「義経千本櫻」の「大物浦」の趣向から、謡曲「船弁慶」をほぼそのまま歌舞伎舞踊化した、松羽目物の一つである。

前シテの静御前と後シテの平知盛の幽霊という、全く違った男女を一人の踊り手が踊り分けるところが見どころとなっている。

梶原景時らの讒言で、兄頼朝の不興をかい、都を落ち延びた義経一行は大物浦から密かに西国へ下ろうとしている。愛妾静は、西国下向の供を願うが許されない。別れの盃を交わした後、義経の所望に、烏帽子をつけて別れの舞を舞う。

「春の曙しろじろと 雪と御室や地主初瀬 花の色香にひかされて 盛りを惜しむ諸
人が 散るをば厭う嵐山
花も青葉の夏木立 しげる鞍馬の山越えて 鳴いて北野のほととぎす 糺の森に秋た
ちて 涼しき風に乙女子が 手振りやさしき七夕の 都踊りのとりなりは その名
高雄や通天の 紅葉はずかし紅模様 野辺の錦も冬枯れて 竹も伏見の白雪に 宇治
の網代の川寒み あさる千鳥の音を鳴きつれて 吹雪に交じり立ち舞うも あした
眩き朝日山影」

「都名所」と名付けられている前半の見せ場である。

出船になって、船頭による「住吉踊り」の舟唄とつづく。

魔風が吹き起こり、後シテの知盛の亡霊があらわれる。ここでは謡曲、歌舞伎と同じく

「そもそもこれは 桓武天皇九代の後胤 平の知盛幽霊なり…」と名乗って義経の船を海中に沈めようとするが、弁慶に祈り伏せられてしまう。

幕外に残った知盛の亡霊が長刀を首の後ろにあてて、ぐるぐる渦巻きのようにまわりながら花道を引っ込む。

四代目中村芝翫が常磐津で踊ったのが最初で、明治十八年（一八八五）、九代目市川團十郎が新歌舞伎十八番の一つとして初演している。作詞は河竹黙阿弥、作曲は杵屋正次郎。

扮装はほぼ能仕立て。静は織物の壺折、知盛は銀の狩衣に大口袴、頭には銀の鍬形をつけている。後シテの知盛は隈をとり、静も六代目尾上菊五郎の工夫で、能面のように無表情な化粧が施されている。

この演目は題名に「弁慶」の名が冠されているが、弁慶は幕切れ近くなって、知盛の亡霊を数珠サラサラと折伏する姿が描かれるのみで、全く主役とは言えない、宗教家としての弁慶が登場する。

弁慶中を押し隔て 打ち物業にて叶うまじと 数珠さらさらと押しもんで 東方降三世 南方軍荼利夜叉明王（ぐんだりやしや） 西方大威徳（だいいとく） 北方金剛夜叉明王 索（さつく）にかけて祈り祈られ 悪霊次第に遠ざかれれば……。

この辺りは歌舞伎「大物浦」の場面と大同小異といえる。

御所櫻堀河夜討 弁慶上使

文耕堂、三好松洛の原作による五段続きの浄瑠璃である。その中で三段目の切、俗に「御所三」ともいう「弁慶上使の段」がよく知られ、まれに四段目の切「藤弥太物語」が上演されることもある。

この浄瑠璃は、「平家物語」「義経記」を基に、土佐坊昌俊の堀川御所襲撃を中心に、伊勢三郎、武蔵坊弁慶、静御前の伝説に加え、謡曲「邯鄲（かんたん）」をもじった五段目の景事「花扇邯鄲枕」を挿入している。

「弁慶上使」までのあらすじを追ってみよう。

平家追討の功成って、義経は意気揚々と堀川御所で日を送っている。けれども、鎌倉にいる兄頼朝は弟に対して不審の二か条を糾すため、梶原平次景高と土佐坊昌俊を上使として遣わす。まず第一は、義経が手に入れた平家の廻文を、なぜ鎌倉に差し込ませているのかという項目。第二には、義経が大納言平時忠の娘卿の君を妻に迎えたことへの不審、である。

三段目でこれらのいきさつが明らかになる。

まず三段目の口。

義経の正妻卿の君(本文では京の君)が義経の子を懐妊、鎌倉方には表向きにせず、今日は腹帯の儀式が執り行われている。卿の君の乳人侍従太郎の妻花の井も伺候している。そこへ、義経に暇も告げず逐電していた伊勢三郎が詫びにやってきて、花の井のとりなしで義経との面談が叶う。三郎は五条の橋で最期を遂げた自分の父親のかたきが義経と誤解していたのが、他にその敵がいることが判明し、「お詫びかたがたまかり出た」と語った。元々伊勢三郎は義経の家来、義経は三郎の詫びの言葉を聞いて許す。けれども、かねて何者かによって持ち出され、紛失していた平家の廻文を三郎が持参していることを咎め、三郎が盗んだのではないかと思ってしまう。現れた弁慶のアドバイスを受け、無実を証明するため、三郎は自分の手で鍬(やじり)の鉄火を握ろうとして義経に止められ、おかげで疑いを晴らすことが出来、主従の契りが回復できた。

そんなところへ梶原景高と土佐坊昌俊がやって来る。梶原は卿の君の首に平家の廻文を添えて鎌倉へ持ち帰ることを義経に告げた。しかし、その廻文の中を読んでもみると、一の谷の合戦で義経に不覚を取らせるため、あえて平家方に寝返った源氏の武将の名前があがっている事がわかった。それには梶原平三景時、源太景季、平次景高の名があり、血判まで押されていた。梶原は、かねて、自分たちの旧悪を隠すため、義経から平家の廻文を取り上げようと策略していたのだった。突然、義経は廻文を火鉢の中に入れ、それを燃やしてしまった。

弁慶は「鎌倉殿への申し開きの一文を燃捨したのはいぶかしい」と主君を咎めるのだが、義経は「源氏の大小

名の中にも連判に加わった輩が沢山居る。鎌倉にこの廻文が届けば、身に覚えのある者は自然と心が隔たり、遂には騒動となることを恐れる。それを思つて焼き捨てたのだ」と語った。義経の心情に、伊勢、弁慶、土佐坊まで「感涙を催した」という。

梶原は「結構なお情け」と「ひやうまづけ」たので、判官はそれを怒って刀に手をかけたのだったが、弁慶がこれを押しとどめ、義経はひとまず伊勢、土佐坊とともに奥へ入っていった。

残った梶原、「笑壺に入り」、「さあ、弁慶、焼いた廻文は是非もなし。その代りには明日ともいわせぬ、卿の君の首討って渡されよ」。弁慶は「時忠公は能登へ流されたので卿の君にはお構いはいはず」。梶原「言訳は暗い、暗い。平家方の娘を具せられたからは、鎌倉に対して謀反と言わんに抜き差しあるまい。卿の君の首討って申し開きあるか、ただし、判官殿に痛い腹切らせるか」と詰め寄るのだった。

そんなわけで、弁慶が三段目切で、やむなく卿の君の首受け取りの上使として侍従太郎の館へ出かけることになる。

三段目切 弁慶上使

この段では、豪快無比の弁慶という男の描写がきわめて奇抜であり、趣向も面白いことから以前から人気の演目となっている。

まず、弁慶の扮装がいい。いが栗の車鬢の鬘、鳥居という隈、黒の大紋、長袴下には赤の襦袢、赤の手甲という拵えである。

時忠の執権職で卿の君の乳人である侍従太郎の館では、卿の君の着帯の祝いの品物が引きも切らない。卿の君は堀川の館から出産のためここへきているのである。

腰元のしのぶの母で、針女（しんみょう一裁縫師）のおわさも祝いに来ている。父親の知れない一人娘を女手ひとりで育て上げた気丈者である。普段は気軽で楽天的、陽気なおしゃべり好きな女である。

やがて弁慶が到着する。出迎えた卿の君に後学のためと、謎めいた「三忘」の講釈をする。いわく、「おおよそ勇士が戦場に赴くとき忘れることが三つある。国を出るとき家を忘れ、境を過ぎると妻子を忘れ、敵陣に臨んでは我が身を忘れる。それでこそ不覚を取らない。婦人の懐妊も同じで、いい子を産む産まぬは生きるか死ぬかの生死の境」とわけのわからないことを言う。

弁慶を奥へ通し、おわさ、しのぶが残っているところへ侍従夫婦が出て来て話を持ちかけてきた。

本文ではここで侍従太郎が勝手に「しのぶを妻に欲しい。花の井は離縁する」とおわさに語る個所がある。しのぶを妻に迎えて卿の君の身替りにさせることが大義名分にかなうとの考えからであろう。

現行の舞台ではこのところは省略され、かねて、卿の君の首を所望するという鎌倉方の難題に、「誰かを身替りに」、という相談がまとまったことをおわさに語るところからである。それについて卿の君と面差しが似ているしのぶの命を貰えまいか、との持ちかけになる。しのぶは覚悟を決めるのだがおわさは承知しない。ここからしのぶを産んだいきさつを語るおわさのクドキである。左の振袖を見せて物語る。実は、しのぶは十七年前、おわさが「播州姫路の福井村の二十六夜の月待夜に稚児姿の見知らぬ男と契って出来た子で、その父に会わせるまでは許してほしい」と頼むのだった。

「上の一重を押し脱げば、右は変わらぬ詰め袖に、左ばかりが振袖の、濃き紅の染め模

様、橘ならぬ袖の香の昔ゆかしく忍ばしく……………、

暗がりに紛れてつい転び寝、つらや人の足音に驚いて、その人は、置き行く袂を捉ゆる拍子、ちぎれてわが手に残りしはこの振袖……………」

しかし太郎は承知せず、困り果ててしまう。

その時、突然、背後の襖越しにしのぶを斬った者がいた。弁慶である。思いがけない展開に、弁慶は「その折の稚児こそ書写山の鬼若丸、若き日の弁慶」と名乗る。その証拠にと、襦袢の片袖を見せる。まさしくそれは、おわさも肌身離さず身に着けていた赤い振袖と同じ柄であった。

この片袖、弁慶が書写山の稚児だったというところからの工夫らしいが、筆や硯、孔雀の羽などの文具を散らした模様が描かれている。

おわさと弁慶は、それぞれ生涯にたった一度の恋だったのである。二人にとって、再会の喜びとわが子を犠牲にする悲しみの入り混じった複雑な心境である。

「生まれてよりこの年まで、後にも先にもたった一度、ほててんごうなことをして、生まれし我が子と聞くよりも、憎かろうか可愛かるまいか。
生まれた時の産声より、ほかには泣かぬ弁慶が、三十余年の溜め涙、一度にせきかけ、たぐりかけ、……」。

「三十余年の溜め涙……」で葛桶から転がり落ち、素襖の袖を頭からかぶって泣き崩れる「大落とし」、ここは弁慶の泣き所という諺があるほど「泣かぬ」男になっている弁慶の「大泣き」である。

前にも書いたが、「勸進帳」の長唄の詞章に「ついに泣かぬ弁慶も、一期の涙ぞ殊勝なる」とある。決して泣くことのない豪傑弁慶が生涯にたった一度だけ涙を流した、と言うのである。

同じ「勸進帳」の後半、再度登場した富樫が先刻の失礼の詫びに酒を振る舞う。その折「今は昔の語り草、あら恥ずかしのわが心、一度まみえし女さえ、迷いの道の関越えて」の長唄の詞章がある。これらは当然「勸進帳」の基となった謡曲「安宅」には見当たらない。歌舞伎が工夫した部分で近世の大衆がよく知っていた弁慶伝説を反映させたものである。これも以前にふれたが、もう一か所、弁慶は「義経千本桜・伏見稻荷鳥居前」の場でも泣いている。

弁慶はわが娘とわかったしのぶを殺し、卿の君の身替りにしようと決意したのだ。瀕死のしのぶは事情も知らず、弁慶を父とも知らず、残された母の身の上を案じつつ息絶える。

梶原との約束の刻限八つになる。ハッと心づいた弁慶は侍従に自分は検死の役だから、しのぶ（卿の君の身替り）の首を討てと迫る。侍従はしのぶの首を討った刀で切腹、自分の首も添えて差し出せば、天地を見抜く梶原も偽りと思うまいと言う。弁慶もその意をくんで、しのぶ、侍従の首を両手に抱えて帰ってゆく。

まるで怪物のような剛毅な弁慶が、過去に一度だけ女性と契りを交わし、その結果娘が生まれていたという意外性がこのドラマの面白さであり、娘を身替りにした後、自分を産んでくれた母親の慈愛を追慕して赤い振袖を頭にかぶって大泣きに泣く、という筋の運びも効果的に描かれている。

侍従夫婦の手前、はじめは涙を抑えていたのだが、おわさがしのぶの死骸を抱いて大声をあげて泣いている。

「そのように泣くを見て、太郎夫婦のござらば、泣くより泣かぬ苦しさは、コリヤ鳴く蟬よりもなかなか、泣かぬ蛭の身をこがすと、小唄もわが身にしられたり」

弁慶の悲嘆な状況である。片袖が十七年目の親子の対面を実現させてくれた感謝と、子を思う親の心からこらえきれなくなった弁慶の心情がほとぼしっている。

武智光秀

絵本太功記

寛政十一年(一七九九)七月、大坂道頓堀若太夫芝居(旧豊竹座)で初演されたもの。太閤一代の読み本で、当時、好評下に刊行中だった「絵本太閤記」を浄瑠璃化したもの。その辻番付の予告には次のように記載がある。

「天正十年六月朔日武智光秀反逆の出陣より同月十三日山崎大合戦まで日数十三日が間を続十三巻に取組」。まだ刊行の途中(初編から三編まで)であったものを、本能寺の変とその後の光秀、秀吉らの動向を脚色舞台化している。

いずれにせよ、刊行途中だった「絵本太閤記」は、それまでの高松城水攻が決着した六月五日で終わっている。この演目で最も知られた十日の段(尼崎)を含む後半部分は、「絵本太閤記」の基となっている「太閤真蹟記」十二編三百六十巻が底本となっていると考えられる。「絵本太功記」の浄瑠璃を書いた作者はこれを見て後半部分を脚色したものらしい。前半部においても、分量的には「絵本太閤記」以上に「太閤真蹟記」によっている個所も多い。しかし、文学性という部分では「絵本太閤記」が優れ、文章も格調が高く、意識的に「絵本太閤記」を踏まえた傾向は否めない。

この「絵本太功記」では、大坂に人気のある秀吉(この作品では真柴久吉)は三日、四日、五日の段の高松城水攻と、七日の段の紀州本願寺との和解、十一日、十二日の段、千里休の件で活躍が見られる。しかしながら、このドラマの中心人物は、何と言っても明智(武智)光秀である。発端(妙国寺蘇鉄怪異の事)、朔日(光秀反逆出陣の事)、二日(本能寺大合戦の事)、六日(光秀妙心寺にて辞世の事)、八日(春長十七日大法事の事)、九日(百姓長兵衛瓜献上の事)、十日(久吉尼崎にて危難の事)、十三日(小栗栖にて光秀討死の事)の主人公となっている。

光秀のこの作品における悲劇の人物像は、浄瑠璃の先行作である近松半二の「仮名写安土問答(かなうつしあづちもんどう)」や「三日太平記」の影響が大きい。こうした光秀を中心とした劇作は、史劇としての価値も高く、この作品において完成を見た、とも言われている。

本作の役名が織田信長を小田春長、明智光秀を武智光秀、羽柴秀吉を真柴久吉と改められているのは、そのまま劇化することが許されなかったからで、のちに「絵本太閤記」も幕府によって絶版となっている。

原本に見る「あらすじ」

発端 (安土の段)、

泉州妙国寺(日蓮宗の寺)にあった蘇鉄を春長は自分の居城である安土の城内に植え替えた。ところが、その蘇鉄がしきりに声を発し、妙国寺へ帰りたがっている夢を見た。陰陽家の安倍氏を召して真偽を問う。その結果、告に従って、春永は暫く蘇鉄を妙国寺へ返すのではなく、預けることにする。また、牢獄に押し込めていた法華を説く普天坊を光秀が「出牢の願い、致されてよからん」とかばうのを聞いて、かねて日蓮宗を嫌う春長、「出過ぎたこと」と怒りを爆発させる。さらに、仏法も来世も信じず、現世における自身の権力を絶対視する春長に対して普天坊は「高祖を軽んじ、悪口雑言、閻魔の庁へ悪逆訴」となじる。光秀は普天坊に、「悪口を吐く手間で、なぜ助命の願いをせぬ」と言い、その言葉の序でに、春長を「悪逆の勇将」と例えたのを咎められ、光秀は散々に打ちすえられる。それでもなお、春長にたて突く普天坊は国境に引たてられてゆく。

六月朔日の段

(二条御所の段)

小田春長は嫡男春忠(織田信忠)の二条御所に上洛する。光秀、森蘭丸はじめ譜代の古老の諸士が伺候している。その折、春忠は院より従三位に叙し、左中將に任じられ、春長は答礼に饗応と能上覧をと、光秀に奥へと案

内させる。後見送った春長は蘭丸を召して、光秀の心中を探り、逆真の心がないか見極めるよう命ずる。

折から、光秀の一子十次郎饗応のため配膳を捧げきた。蘭丸これを見て、饗応の役は自分と武智の役、その相談もなく気ままな致し方と、来合わせた光秀と口論になる。かつての古い話を持ち出して誹謗する傍若無人な蘭丸に、さしもの光秀もハッとせきあげ、互いに詰め寄るその時、襖をあけて春長が飛び出し、「頬ぶて、蘭丸」との言葉に、蘭丸は鉄扇で光秀の眉間を続けうちに打った。「口惜しいか」との春長に、光秀は「大恩あるご主人にはお恨みなし、けれども、春長こそ鬼の再来、情を知らぬ大将と末代まで言われるのが悲しい」と言うに、更に春長は怒り、「目通り叶わぬ、門外へ引き出させよ」と烈しい下知、光秀は、傍で歯を食いしばって泣いていた十次郎ともども出て行く。

(千本通りの段)

光秀の上屋敷は京の千本通りにある。留守は妻の操が守っている。光秀の配下の九野豊後守、今日の饗応役に対し祝意を述べているところへ、光秀親子が帰ってきた。操は末子乙寿丸とともにこれを迎えるが、光秀は不興の体で顔色もよくない。心配する操に十次郎は「春長と蘭丸の悪口雑言、眉間に傷まで」と無念の涙を流した。様子を立聞きしていた四王天但馬守政孝は表に飛び出そうとするが、豊後守に留められる。

そのうち、上使が到着、赤っ面の赤山与三兵衛から「真柴久吉の中国征伐の加勢してその配下で戦功を励むべし。その功勞にて出雲石見を賜る」との下知であった。その上、今までの丹州近江の二か国は召し上げられる、とのこと。まことに真綿に針の青畳の仕打ちに主従はかわす言葉もない。

一徹短気の但馬守、「一時に小田を討ち亡し、功を上げる」と意気込む。豊後守は「反逆謀反の輩に本位を達した者はなし」とこれを諫める。しかし、光秀は豊後守を殺し、ついに決起の意を固める。

六月二日の段

(本能寺の段) (合戦の段)

春長が逗留する本能寺には阿野の局も、春長の孫三法師（信忠の子織田秀信）を連れて伺候し、春長は蘭丸とともに酒席を張っている。蘭丸は光秀の動静が気になるが、春長は全く意に介していない。蘭丸には、かねて人目を忍ぶしのぶという女性がいた。しのぶは斎藤蔵之助の妹で、蘭丸のそばにいたいばかりで奥勤めで、その夜、積極的に「わりなき仲」となるのだった。

二日子の下刻（今の三日午前一時ころ）、眠れない春長は夏の夜の吹く風に障子を開け、ねぐらの鳥が騒がしいのに合点がいけないと感じていた。鐘太鼓、人馬のの物音が次第に近づく。「物見」というに蘭丸、「察するところ光秀の反逆」、「たとえ防ごうにもわずか三百余人」、「チエ、口惜しや」と主従は逆立つ髪、歯ぎしりして無念の涙を流す。

春長は阿野の局に、三法師を守護し、織田家の正当を踏む平家の赤旗とともに真柴久吉に渡し、自分の存念を晴らすように伝え、奮闘空しく自らの脇腹に刀突き立て、果てるのであった。

六月三日の段

(高松城の段)

名城と名高い高松城も、真柴久吉軍の水攻めで、高松方の強勇の兵士たちもなすところなく手に汗握るばかりである。

高松城の城将清水長右衛門(清水宗次)の妹玉露は浦辺山三郎(長沼山三郎)に恋焦がれていた。それ以前、山三郎の父親奎之進は、林丈左衛門(林三郎左衛門)にだまし討ちにあい、山三郎はその敵討ちを狙っていた。しかし、高松を加勢している郡(毛利)家からは「軍中だから」と許可を与えていなかった。

そんな折、清水長右衛門の女房やり梅、郡の城の人質(清水宗次は毛利方へ嗣子源三郎を人質に出していた)だった嬰兒を抱いて帰ってきた。敵に囲まれた城中へ帰ったことへの不安に運の傾くことを嘆く。程なく郡家より安徳寺の和尚がやってきた。

玉露の手引きで見事、山三郎は親の仇丈左衛門を討つことが出来た。そしてその後、本懐を達した山三郎は切腹しようとするのだが、長右衛門に止められる。許しもない敵討ちの言訳のための切腹なら、武士の道を立てるため城外の水をくぐり、真柴久吉の陣地に潜り込んで真実を話し、匿いを頼め、その結果、敵軍の手薄なところや戦線の変動を合図で知らせよ、と諭される。

山三郎は玉露と、赦されて祝言を上げる。

(城外の段)

水かさが増える大河に、加藤正清(実名 加藤清正)が土木工事を指揮している。そこへ、高松城外から怪しげな喧嘩の声とともに水中に人影が現れる。山三郎である。加藤は山三郎を捕えさせ、尋問する。その結果事情が分かり、山三郎が内心久吉を討つことに血気盛んであるのも加藤は気づかず、久吉の下に同道する。

はるか向こうには、玉露と安徳寺の僧を乗せた小船がどこかを指して出るようである。

六月四日の段 (谷間の段)

ここは小梅川隆景(史実の小早川隆景一毛利元就の第三子)、久吉の近くに陣を張っている。

そこへ玉露と安徳寺の僧が到着、高松城の城主清水長右衛門の親書を手渡した。その中には、以前、和睦を進言した隆景への返事がしたためられており、停戦に同意する旨書かれてあった。隆景はその交渉役に玉露と僧を遣わすことにした。

六月五日の段 (蛙が鼻陣所の段)

ここは久吉の陣地、雑兵どもが世間話に興じているところへ、突然、遠見していた兵が「郡城、高松城から使者として女一人僧一人、陣中にやってきた」ことを告げ、正清は二人から「山三郎を返してほしい」と告げられる。一旦二人は別々に部屋へ通される。

その夜、玉露は山三郎に出会い、「真柴久吉を討つ手柄をみせん」と意気込むが、山三郎は「とてもかなう相手ではない」と、高松への申し訳に切腹しようとする。「私も共に」とする玉露。そこへ突然久吉が現れ、玉露には顔を立てて山三郎引渡しの要求にこたえ、山三郎には久吉の使者として高松へ帰るよう告げる。久吉は山三郎を入り込ませた清水高松城主の計略をすでに読んでいたのである。

またも女武者の登場、雑兵の陣笠をつけ手負い姿で現れたのは阿野の局、「一大事の注進」と。久吉召して聞けば「逆臣武智によって夜討ち、無念の最期」と形見のお家の御旗をしめし、「久吉の知略で武智を討ち取って、亡君に手向けを」と述べ、同時に落入ったのである。

これを聞いていた郡から遣わされていた安徳寺の僧、「エヘン」と咳払いして郡へ帰ることを言い出した。久吉「この上は、小田と郡の和を結ぶのが一番、その仲介を貴僧に」と。安徳寺も「和議の談合をととのえる」と答えるのであった。安徳寺僧恵瓊(えけい)は天明が久吉に下りつつあることを悟り、久吉に協力することが毛利家のため、天下の為であると考えたのである。

史実の安徳寺恵瓊は、この毛利家との和睦を成立させて以後、秀吉から重用され、七万石余りを領したが、最後は関ヶ原の合戦で、石田三成とむすび、敗戦し処刑されている。

僧を送った久吉のところに矢文が届く。高松城主清水長右衛門の自筆血判である。久吉は止めてある川の関を開き、水は見る見る減ってゆく。

清水は久吉の前に出、鎧脱ぎ捨て腹一文字に引切った。

久吉は、やってきた小梅川隆景に、主君小田春長の光秀の謀反による落命を告げ、弔い合戦に郡家の助力を請い、快諾を得た。これによって、後続の援軍を得て、久吉は加藤正清をはじめとする一軍を引き連れ、天王山へと向かう。

六月六日の段（妙心寺の段）

多年の恨みを果たした武智光秀は妙心寺に陣を構えている。光秀の母臯月は「(その話は)聞きたくない」と立腹である。四王天但馬守は光秀の妻操とともにこれをなだめる、多少和らいだ表情で「息子殿(光秀)が帰ったら知らせるよう」言って奥へ行く。

十次郎の許嫁は色香もしきる初菊である。十次郎はなかなか相手にしてくれない。思いは同じ十次郎だが、ここで二人は嬉しい願いを遂げる。

ここまでが浄瑠璃の端場、大夫三味線が替わる。

「折からとどろく轡の音」で、光秀が帰ってきて、操とともに三人が出迎える。そんなところへ母臯月が木綿布子に風呂敷包を背に背負って現れる。賤女のなりである。驚く面々に、「心けがれた我が子のそば、一時たりとも座を同じうしたくない。雲水に従って出てゆく」と涙を紛らわす。操の止めるのも聞かず、光秀は「詫び言もなし、母のお心に逆らわぬが寸志の孝」と母を送り出すのだった。

光秀は「母の行方を見届けよ」と下知、軍卒が後を急ぐ。妻と十次郎夫婦を次の間に立たせ、光秀は硯を引き寄せ唐紙に何やら書き始めた。

「順逆二門なし、大道心源に徹す。五十五年の夢覚来て、一元に帰すとは何のたは言。君、臣見る事、塵芥の如くせば、臣、君を見ること怨敵の如し」辞世の一句である。そっと覗いていた四王天但馬守、それに十次郎、しっかと止める。

光秀、「誤ったり、一天の君の御ために」と参内のため馬を引かせる。

本作の光秀は、天皇こそ最高の主君であり、天皇に忠誠を尽くせば、直接の主君である信長反逆の罪は問われない、との考えに至っているのである。さらに、六日まで戦略的には最も重要な三日間を、何の手立てもなく過ごしている。本文の光秀は三日間悩み続けた。ここで「一天の君の御ために」という形で自分を正当化する道を見出し、一転して強くなる。

六月七日の段（杉の森の段）

この段は猛威を振るう仏敵一向一揆の石山本願寺との十余年の戦いの後、天正八年、朝廷の仲介によって本願寺と信長は講和が成立し、石山を退去し、本願寺の本拠地を紀州鷲森(現在の鷲森別院)に移した後のことを物語っている。

講和は成立したものの、性懲りもなく小田の大群が押し寄せてくる。叶わぬ事には孫市(史実は石山本願寺方の主戦力、雑賀党の勇士鈴木孫一)が小田との和睦に失敗した咎で勘当を受けている。

孫市の妻雪の谷が舅鱸重成(石山軍記物の中心人物鈴木飛騨守重幸をさす)に、夫の勘当を解くよう頼むのだが、重成は聞く耳を持たない。

人目を忍んで孫市が切戸口にたたずんでいる折、茂みから辺りをうかがって奥へ行こうとしている男を見つける。斬り合いになる。手燭を片手に持った雪の谷が「何事ならん」と息を詰めて見守った。孫市は難なく曲者を斬り倒し、懷中に持っていた一書を見つけ、

月を透かして読んだ。「春長親子、光秀によって亡ぶ」の文、その声を聴いて雪の谷は夫の声と悟った。しかし、孫市は小田春長が約束を違えたことで親に勘当を受け、何とかして春長の首を討ちとって詫びにしたいと思っていたのが、こういう結果になって武運も尽きたことを知り、切腹することを覚悟するのだった。

そして、倅の重若、娘の松代を呼び寄せ、自分の首を真柴久吉に届けるよう言い渡す。

この場面は男女二人の子供に切腹した自分の首を切らせて、和睦、または申し訳すべき相手のところへ持って

ゆかせ、妻がそばで焦り悲しむ、という「女蟬丸三」(享保九年)から転用したものである。

切腹の邪魔と、雪の谷は、提げ緒(刀の鞘についている紐、刀を帯に結びとめるのに用いる)で杉の木に縛られる。それでも、おろおろした二人の子供に、「とと様の両の手に取りついていや、必ず放してたもるな」とばかりに懇願する。「女蟬丸三」では、「それとゝ様のそちらの手をきっと取ってはなしやるな」と描写している。

そこへ孫市の父重成が登場、「勘当を赦す」と、「むごい祖父(ぢい)じゃと、コリヤ恨でばしくれるなよ。我とても骨肉の俵を見殺す胸のうち、どのように有ふと思ふぞやい、チェエ是非もなき次第や」と親の思いを述べるのだった。

ここは「菅原伝授手習鑑」三の切、櫻丸切腹での白太夫のセリフを踏まえている。泣き叫ぶ妻子の前で腹を切るという「責め場」、「愁嘆場」でもある。

重成としては主君への義理のため勘当したので、孫市の犠牲死を前提にしなければ勘当が許せない、その苦しさを語っている。ただ、孫市がどうしても自分の子供に首を切らせなければならぬのかその理由がわからない、不自然な設定である。

六月八日の段 (法事の段)

今日は春長の初七日の法要である。光秀は六日の参内によって、將軍に任ぜられている。(ただしこれは史実ではない) 参詣の群衆は引きも切らず、それを目当てに見世物、軽業なども出ている。取り仕切る太郎作に、取締りの甚助が難癖をつける。が、袖の下のおかげで、無事切り抜けられる。そのあと、甚助の下級街娼との滑稽な色事がある。息抜きの場面である。

人目を忍ぶ深編笠で、光秀の倅十次郎がやって来る。「昨日の君臣は今日の怨敵、……是非もなき世のありさま」としばしの物思いにふけている、その場に家来を引き連れた甚助が来る。斬り合いになる。しかし、十次郎が上手、甚助は斬られ、家来どもは逃げうせる。

十次郎の決意が固まる。「すぐにばば様(皐月)の隠居所へ行き、出陣のお願いを申し、敵をなぎ倒し、武士の本意を達せん」と勇み立つ。

本文では「屍は修羅の巷にさらし」と、ここで、討ち死にをすでに決意している十次郎が描かれ、「十日の段」の悲劇にかかわる場面となっている。

六月九日の段 (瓜献上の段)

中国の敵を攻め、和睦という結果を勝ち取った久吉は、正清はじめ軍兵を従え、大物浦に着陣している。はや正清に久吉は、うかつに上京することを戒め、「油断大敵」と慎重さを示している。

そんな折、頭髪を手拭いで包んだ百姓風のたくましい男が藁ふご(藁で編み、縄で吊って担う駕籠の一種)を下げた棒を担い、僧と連れ立って出てきた。「土民蛸坊主、久吉さまの御前」との軍兵の制止に、「大坂今里村の長兵衛と江州の観音寺の僧献穴(けんけつ)」と名乗り、久吉に面会を求める。久吉は見おぼえない二人に怪訝な表情だったが、かつて、今川義元との戦いの折、春長、久吉が逃げ込んだのが長兵衛の家、僧は小姓にしていた岸田太吉を久吉の小姓に献上した者、と語ったのである。久吉は「覚えある、して、我らが願いとは」と聞くことになる。それは、光秀が自分の居所近くに陣を張っているので、そっと久吉を連れ出して光秀を討つことを提案することだった。そして、土産に「明け地にできた真桑瓜、切って上って」と言い差し出す。久吉はこれに満足の意を示した。

その時、傍の稲かげから武智の軍勢が討ちかかり、敵味方入り乱れての争いとなった。久吉は「百姓長兵衛とは偽り、光秀の旧臣、四王天但馬守」と見抜き、「見頭わされて残念至極」と勝負となる。その間に久吉は僧の袈裟衣を身に着け、馬に乗って駆け出して行った。四王天はこれを追う。しかし、四王天を追った正清の太刀によって絶命する。

六月十日の段（尼が崎の段）

光秀の母皐月は夕顔棚のある尼崎の百姓家に隠遁生活を送っている。そこへ光秀の嫁操は十次郎の嫁初菊を連れて「見舞い」と称してやって来る。皐月は善悪はともかく、「夫に付くのが女の道、生死わからぬ戦場へ赴く夫を捨てて、浮世を捨てた姑に孝を尽くすのは道が違う」とたしなめる。「今からは初菊とともにおそばで仕える」と、姑の気質を知った操はその言葉には逆らわない。皐月は孫十次郎の身の上をも心配する。十次郎は出陣するに当たり、「皐月の許しが得たい」と、母操に取り次ぐよう願っているらしい。

そんな折、草鞋掛けで風呂敷包を背負った旅の僧が「お宿の報酬に預りたい」とやってきた。老母は気安くこれを受け、僧は「遠慮なしに御免、御免」と草鞋の紐を解いた。

表口に、人目を忍んでただ一騎、これを窺い、立ち聞きしていた者がいる。光秀である。生垣を押し分けて「心得難い旅僧」と覗いているうち、母と目が合ってしまう。老母は何かを感じたらしいが、僧に風呂を勧める。

そこへ十次郎が、皐月に「お願いの筋がある」とやってきて、威儀を正して出陣の許しを請う。老母は、自分の願いとして「今宵この家で祝言の盃ごとをして門出に」と。初菊は飛び立つばかり気もいそいそ、だが十次郎は「今日初陣に討死と、覚悟極めたこの体」。黙然と忍び泣きである。「ばばさまの気の変わらぬうちに固めの杯」と三人は内へはいる。

残った十次郎、討死に赴くことを覚悟して母、祖母への不孝と初菊へは自分への縁を思い切るよう、孝と恋との万感の思いをかこつ折、蔭でそれを聞いていた初菊は「夫の討死を妻が知らいで何としよう」とかき口説くのだった。ばばと母は祝言の用意、「祝言と出陣の一緒の盃」喜ぶほどにいや増す名残、攻め太鼓の音とともに、十次郎は出かける。

以前の旅僧、「お湯が沸いた」と言ってくる。「どうぞお先へ」と母と嫁、出家は「おさきに」と湯殿へ。

「夕顔棚のこなたより、現れいでたる武智光秀」。光秀は久吉の居ることが間違いなしと、一本竹を取り小刀で斜めに切って竹槍を作る。さらに、屋体に入り、上手の屋体の気配を窺って、竹槍を突っ込んだ。「わッ」と女の声、合点いかず手負を引き出して驚く。久吉ではなく、母の皐月だった。仰天し、呆然とする光秀。声にびっくり、操と初菊、皐月は気丈に

「主君を害せし武智が一類、かくなり果つるは理の当然、系図正しきわが家を、逆賊非道の名を残す、不幸者とも悪人とも、譬えがたなき人非人……、主を殺した天罰の報いは親にもこのとおり」

光秀は声荒らげ

「ヤアちょございな諫言立て、無益な舌の根動かすな。遺恨を重ねる小田春長、もちろん三代相思の主君でなく、わが諫めを用いずして、神仏閣を破却し、悪逆日々に増長すれば、武門の習い天下のため、討ち取ったるはわが器量……」。

取りつく島もない。

折しも聞こえる陣太鼓、手傷を負った十次郎、血を流し、刀を杖に立ち帰った。操、初菊は縋り付いて泣くばかり。光秀は「様子はいかに、」と仔細を聞く。十次郎の物語となる。

優勢だった味方も、加藤正清に追いまくられ、瞬くうちに味方の軍卒どもは残らず討死、ただ、自分だけ落ちのいてきたこと、四方天但馬守の行方も分からない、と。そして光秀に早く本国へ引き上げるよう勧める。皐月は手負いながら父を気遣う孫の孝心を褒め、母操は「今朝の、功名手柄を楽しみに、にっと笑った顔が忘れられない」と嘆き、初菊も「一緒に殺してたべ、死にたいわいな」と身悶えする。

さすが勇気の光秀も、親の慈悲心、子ゆえの闇、輪廻のきづなに締つけられて、扇で顔を覆って悲嘆の涙をふ

りしぼる。「大落し」である。

またも聞こえる陣太鼓に、光秀は松の木の上に登って「戦況如何に」と見下ろす。見えた千成瓢箪、疑うまでもない真柴久吉の軍勢と、勢い込んで駆け出すとき、「ヤアヤア、武智光秀暫く待て」と、法衣を陣羽織、小手すね当て姿に変えた久吉が現れた。

そして、「ここで雌雄を決するのをやめ、後日、山崎で勝負」と二人は別れてゆくのだった。

六月十一日の段（淀堤の段）

光秀の落胤、八歳の音寿丸を、松田太郎左衛門政道の妻、柵（しがらみ）がつれて夜道の淀堤に来かかる。しかし、途中で久吉の追手に出会う。けれども柵の奮闘でこの場を遁れることが出来る。

六月十二日の段（松田利休住家の段）

柵は、かつて十三歳の折家出した松田太郎左衛門の連れ合いで、彼女は音寿丸を連れて舅の住家松田宗右衛門宅を訪ねてきたのである。

いったん舅に拒否されるのだが姑のとりなしで奥へ通され、柵は夫の手紙を見せる。手紙はこのたびの合戦を負け戦と思って、光秀の忘れ形見、音寿丸の養育を頼み、成長の後には出家させることを依頼したものだ。その上、柵は森尾茂助(史実の堀尾茂助吉晴で、のちに秀吉の三中老の一人)の妹なので、親の手で離縁させるようとの文面だった。柵はこれにびっくりする。舅宗右衛門は、さらに、久吉も時に茶道をたしなむ自分のところへ来るので、音寿丸こそ願ってもないよい獲物と、首討ち落とし久吉に献ずる、とまで言うのだ。柵はまたまた驚き、音寿丸を連れて帰ろうとするが、舅は音寿丸を小脇に抱え、柵を当身で気絶させ、奥へ行ってしまう。

気が付いた柵、若君を連れ去った舅を嘆くが、その時、さらに一通の、柵殿へとしたための書跡を見つける。それは夫太郎左衛門の遺書だった。そこには太郎左衛門が、女房の縁に引かされて女房の兄に首を与えたと言われている武門の恥、離別したその上で縁者でない森尾茂助に討たれることが書いてあった。

柵は夫の最期がこの暁、と、天王山に駆けつけることを決めたのだ。

(天王山の段)

天王山に辿りついた柵、森尾・松田の争いにであい、「待って下さんせ、兄様、思い止まって」と、嘆きかこつを、二人は耳にもかけず戦う。

何を思ったか、松田太郎左衛門、鎧を脱ぎどっかと座し、「名もなき士卒の手に掛らんより」と腹に刀を立てるのだ。

(利休住家の段)

松田宗左衛門利休の妻は真弓という。彼女は、自分たちの息子にとっては、音寿丸は、お主の若君であって、手に掛けるとは……と、命乞い、助命を願っている。しかし亭主は自分の好む薄茶の手前に没頭している。

折も折、天王山の方からは「松田太郎左衛門の首、森尾吉晴討ち取ったり」との声が聞こえてくる。宗左衛門利休は、音寿丸を斬ろうとして、それを止めようとする真弓とせめぎ合う。その時、柵が背に夫の首を結びつけ駆け戻ってきた。柵も音寿丸を後ろにかばって、声震わせて舅に訴えるのだが、地獄の呵責三悪道の権化、「エイ」とばかりに幼児の首を打ち落とししたのである。「久吉の本陣へ」と駆け出す利休、そこへ、軍卒の高提灯で入封をこらした真柴久吉がやってきた。

久吉は首実検、利休にはその恩賞として風雅を極めた別荘へ据え石を、小袖代わりに贈られた。

柵は表方に駆け出そうとしたが、利休はこれを止め意外なことを吐露するのだ。つまり、音寿丸を斬ったと見せかけ、その身替りに、実の孫の千石を斬ったのであった。

利休は真実を語ったのち、嫁、女房の止めようとするのを「放せ、放せ」と争いながらも切腹を図る。

陣所へ帰る体に見せて次の間で窺っていた久吉が、突然姿を現わした。「こんなこともあることを察し、忍び窺っていた。死んだ者への菩提を弔うよう、ここに庵を建て、好きな茶の道で行き来の人に振る舞え。それが死

よりも増す節義」。利休も「心の濁りを墨染めの衣に代え、茶道の道を広く広めんため、利休を千の利休と改名し、在世のままで佛として本性を全うする」と言うのだった。

この時より、千利休は久吉の茶道の師なのである。

そこへ、戦場よりのご注進が来た。両軍会いまみえ、たたかってきたのだが、敵の勇将蟹江才蔵を、福島の中から小兵の桂市兵衛が飛びかかって生け捕り、さらには形勢不利と見て、光秀には親しかった筒井順慶が寝返り、光秀の陣所に攻め、敵は狼狽し、光秀もたった一騎で小来栖さして落ち延びて行った、とのことだった。

久吉は小来栖への加勢と、馬に乗って帰陣していった。

六月十三日の段

ただ一騎、落ち武者となった武智光秀、小来栖の藪蔭までさしかかり、真柴方の軍兵を敗走させる強さを見せた。しかし、群がって鳴く蟬の声が光秀を弔う読経のように聞こえ、竹槍が突っ込まれる。百姓どもの竹槍だった。無念の光秀、自らの刀を腹へ突き立てる。

程なくやってきた久吉、「いかに光秀、主を討つた天罰の報いを思い知ったるか」と、その首を打ち落とすのだった。

時今也桔梗旗揚（ときはいまききょうのはたあげ）

通称「馬盃の光秀」と呼ばれる全五幕の時代物の演目である。勝彦蔵(四代目鶴屋南北)の作品で、文化五年(一八〇八)七月、江戸市村座で初演された。初演の時は本外題を「時桔梗出世請状(ときもききょうしゅっせのうけじょう)」といていた。南北は本来史劇(時代物)は得意ではなかったが、初演の五代目松本幸四郎の光秀が大評判となったため、長く舞台に残っている作品である。

作者南北は、浄瑠璃に登場する光秀を題材とした作品からこの演目を書いたとみられるが、「祇園祭礼信仰記(金閣寺)」、「三日太平記」、前出の「絵本太功記」などがおもなものである。今日では、原作の序幕の切の「饗応」、三幕目の「馬盃」、「愛宕山」の三幕の上演が多い。

南北には珍しい時代物であるが、小田春永(史実の織田信長)が光秀を追いつめていく過程の心理描写や、光秀が主君の理不尽ないじめによって謀反を決意する過程が見事に描かれている。三宅周太郎氏は「我が国の史劇の先駆」と評して、丸本物につきものの浄瑠璃を使わない手法で近代的な香りを加味したものとして出来上がっている。

初演の幸四郎は、

「実悪をさせては、当時ほかにいたひてはないぞ」とか

「奴請状の光秀なぞは恐ろしいものじゃ。顔色をかへて仕打をきかれさるる斗でも肝に

こたへる」

などと、当時の劇評に称賛されている。今残されている演出は、九代目市川團十郎のものと、七代目市川團像のものである。特に團蔵はこの光秀に自信を持っており、團十郎と張り合っていたと言われている。

あらすじ

序幕は祇園の社殿から仮御殿の饗応までで、光秀が蜘蛛が流れに落ちた柳の葉を掴んで巢に帰るといふ振舞を見て怪しむところ。また、以前小田家に仕えていた逆賊福富平馬によって奪われた春永公の奉納の赤旗を光秀の妻の皐月が奪い返す。これまでは現行の舞台では省略されることが多い。

「饗応の場」

世尊寺中納言の饗応司は光秀だった。ところが、水色に桔梗の紋所の幕を張り巡らしていたのが、まず春永の勘気に触れた。さらに、内勅の公卿をもてなすのに過大な器物、山海の珍果を整えるという費えを厭わないやり方に、光秀の独断をなじったのである。あげく禁庭の侍臣に懇意となって後日の便宜を受する魂胆か、と言い放ち、春永は光秀の忠勤を逆に、かつて家臣に取り立て、列候に加え、一国を領するまでになったいきさつを、主君への恩義を忘れた結果であると冒瀆する。光秀は、「コハ存じ寄らぬお疑い、たとへまらうど客人何人のもいたせ、君命によって心を労し粗略を存ぜぬ光秀に、面目を失うただいまの御詫」に、春永は「身が手を下すも無益しい、蘭丸、きゃつが生き顔を張れ」。その上、春永の短慮を諫めたことでさらに勘気はさらに増大する。蘭丸は打つ。さらに重ねて陣扇のかなめで「ご上意だ」と眉間を打ちつける。春永は「国に盗賊、家には鼠と、ムム、そちやしかも子の年、道理こそ恩知らず、したが蘭丸といふ逸物の猫にぶたれて、アノみすばらしいなりわえ。エ、面わえ。」と嘲笑され、饗応は蘭丸が替わって取り仕切ることになり、光秀は無念のこなし、額の血が流れる。

「本能寺の場」

春永が本能寺にやって来る。客殿には春永をもてなす活け花が献上されている。中に、中国攻めの真柴久吉からのものがあり、馬盥に錦木を轡止めに活けたものだった。春永はこれを「心あってしおらしい」と褒める。その一方、光秀の妹桔梗の活けた紫陽花と昼顔を見た途端、平家の姿を連想させると言って機嫌を損じる。しかし、改めて本能寺の日和上人はじめ、蘭丸、桔梗のとりなしで 光秀のお目通りが叶うことになった。けれども、春永の態度は尋常ではない。光秀は許しが叶ったと喜び伺候するが、牛馬や犬に例えられ、「牛馬はもちろん犬も三日扶持なせばその恩を知り、尾を振ってしなだるる。畜類でもその通り、いわんや人間……」と嫌味を言う。ついには「杯くりょう、その方へくれる杯は」と馬の足を洗う盥に酒を注いで差し出す。光秀はこれを飲み干す。

陰鬱な春永の言動はこれに止まらない。「中国へ出馬いたせ」、「久吉が幕下に属なせ」、「真柴が鞭に従うて、高いななきして馳せめぐれ」と。その上、近江、丹波の領地没収をほのめかしたり、かねて光秀が懇望していた名剣日吉丸を光秀の目の前で臣下の中尾弥太郎に渡してしまう。そして、「その方へ太刀かたなは無益の品、その方には似合う遊芸乱舞の道具が相応」と白木の箱を与える。中には女の黒髪。それは、かつて光秀が流浪して貧苦に苦しんでいた折、越前で光秀の妻皐月がわずかな鳥目を得るため、髪を切って旅商人に売ったものだった。春永はそんな過去を満座の中で暴露したのである。

光秀はじっと思い入れ、足早にその場を去って行く。

「愛宕山連歌の段」

ここは愛宕山西の坊、信徳院の座敷、連歌の催しの会場である。光秀の妻皐月、家臣の安田作兵衛、それに連歌師宇野紹巴が来ている。光秀が帰ってきた。妻は夫の顔色がさえないことを心配している。二人だけになって春永から賜った木箱を見せる。皐月もこの中を見てびっくり、その恥辱に耐えかねている。奥でこのことを知った紹巴は光秀に謀反を吹き込む。光秀はこれを無言で斬捨て、返り血は光秀の上下衣服にかかる。そこへ春永からの上使。浅山多三と中尾弥太郎である。中尾には先刻、光秀懇願の銘刀日吉丸が春永から下賜されている。上使の一条を浅山が読もうとした時、一陣の風が吹き、明かりが消えてしまう。その間に光秀は白無垢、水袴、三宝に九寸五分を持ってこさせ、かねて上使の趣を丹波近江の両国のお召し上げと承知して「うけたまわらぬその先に覚悟の姿」と耐え切れない屈辱に武士として死を持って抗議することを述べる。妻皐月や妹の桔梗をしかりつけ、首をはねるときには日吉丸で介錯することを浅山に依頼する。

辞世の句を詠む。 「時は今 天が下知る、皐月かな」

’ まさに切腹の瞬間、光秀は自分で持っていた短刀で浅山を打ちつけ、さらに日吉丸を奪って中尾の首を討ち

落としたのである。そこへ、光秀の家臣安田作兵衛が駆け付け、光秀の命に従って、光秀の軍が本能寺を包囲していることを注進してくる。驚きとめようとした皐月、桔梗を押しとどめ、「すぐさま向かって春永のみ首を申し受け、勝ちどき上ぐるは瞬くうち」、「ヤア、今となっては益なき繰り言。一天四海を掌握なし栄華をきわめん我が所存、その方たちの知る事ならず、いらざる諫言、控え居ろう」と本能寺へ向かう。

光秀役 中村吉右衛門の役作り

(2012年9月 秀山祭、新橋演舞場 NHK/Eテレより)

光秀初役の思い出

初演は勉強会の時、実父の八代目松本幸四郎(白鸚)に教わった。実父は初代吉右衛門に教わり、それが自分に伝わったと考える。いつもは性根だけは厳しく伝授され、それ以外は簡単にしか教わらないのが、この演目だけは手取り足取り、セリフ廻しも何回も気迫十分で教わった。

吉右衛門が考える光秀

春永がかつての光秀の苦境を知って召し抱えられた恩義を深く感じていた男である。知識人、常識家で、教養も十分兼備していたことから、それをすぐ口に出してしまうことが春永に「カチン」とくるように書かれており、主君には絶対服従するけれども、言うべきことははっきり言うという考え方の人物と思っている。

屈辱を受けた光秀の心情

光秀の女房皐月が、女の命ともいえる髪を切ってその貧しさをしのいだという、男としては恥ずべきことを、満座の中でそれを見せつけられた。本来、夫婦二人だけの胸にしまっておくべきことを披露されたことが限度を超えたものがある。それを四代目南北は巧く作劇したことには大変感心している。

光秀役の難しい箇所

何と言っても愛宕山連歌の場の最後の見得で、三日間だけの天下人の大きさを見せることが何とも難しい。

演出の面白さ

この演目には、初演時の五代目松本幸四郎の陰鬱な演技が評判になっており、当時の劇評を見ても、「実悪をさせては当時他にいたひてはならないぞ」とか「奴請丈の光秀なぞは恐ろしいものじゃ。顔色を変へて仕打をきかざる斗でも肝にこたへる」などと書かれている。その後、多くの名優に受け継がれてきているが、今残っているのは大きく分けて、九代目市川團十郎と七代目市川團蔵の二つの流れがある。團十郎は男性的な演技、團蔵は陰に籠った反逆児といった演技である。後には、七代目市川中車、十一代目團十郎、十三代目片岡仁左衛門などが得意としていたが、ほかにも、初代中村吉右衛門の團蔵系の演出が近代的なアレンジを加えて「饗応」での恨めしそうな悲壮感、「本能寺の場」での、「スリヤ、この切髪は越路にて、光秀流浪のそのみぎり、…」の感情が高揚したセリフなどは大変な評価を得ていた。彼の演技は「男の鏡山」とも評されていた。今では、十五代目仁左衛門、当代の二代目吉右衛門が持ち役としている。

「饗応」

この場は春永の理不尽ともいえる言いがかりに対して、光秀の理路整然とした言訳がうまく描写されているが、思いつきのように理にかなわぬ言行の春永に落ち着き払った光秀との対比が見どころとなっている。幕切は、光秀が眉間を割られた鉄扇を恨めし気に見て顔を隠す団十郎型と、光秀が様子を見に来た臣下の安田作兵衛と顔が合い、ハッとする團蔵のやり方がある。

「馬壘」

ここでは主君春永は上手一段と高い二畳台に座って、常に光秀を見下ろしている。光秀は下に座り耐えているという演出である。ここでの春永は徹底した苛めによって異常性格とも思われる演技を見せる。そのことによって光秀の忍耐が極度に誇張され、謀反への思いが強まることを助長している。

馬壘の件では、團十郎は戦国武将としての光秀を演じ、あっさり謀反の野望を抱いて、恨みとは程遠いという解釈、團蔵は、一旦目を剥いて、のち思い直して引っ込むという、恨みを強調した演技であったらしい。光秀の衣裳は紫紺の袴だが、団十郎は桔梗紋をくすんだ銀色にして陰鬱な感じを出し、これが現在の型になっている。

幕切では、光秀が、もうこれまでと、謀反の心を箱を持ちなおす(箱をたたく型もある)ことで表し、ここで柀の頭となる。十三代目仁左衛門は「上手の襖から蘭丸が様子を探っているのを、振り返った光秀が顔を合わせ、ここまで疑われているのかという絶望で「箱たたき」、つまり、謀反の決意をするやり方にしています」(芝居噺)。という演出もある。

「愛宕山」

前半の切髪をめぐって、光秀と皐月のやり取りはカットされることが多いが、本来、夫婦の情愛を現す場面として捨てがたい。しんみりした愁嘆場から連歌師紹巴の死、そして上使、切腹の用意へと重苦しい舞台が続く。ここでは光秀役の見せ所でもある。続いて光秀の上使殺害、作兵衛の注進と、一気に舞台の緊迫感が高まり、それまでの雰囲気とはがらりと変わった情景が爆発するような展開となる。ここで見せる光秀の大見得は、観客にとって、鬱積した感情から快哉を感じる大きな効果をもたらすもので、三宝を踏み砕いて刀を担ぐ団十郎型と、中二階で欄干に足をかけて揚幕を見込む團蔵のやり方がある。

十三代目仁左衛門は、『作兵衛ちこう』、『ハハーッ』で顔を見合わせ、光秀が『ウフン』と笑うのが柀の頭で、『ウハハハハ』と大きく笑い、差し出す刀で作兵衛が鎧の上帯をほどいて拭くと、キザミで幕となります。全体を、光秀は時代物らしいスケールの大きさが必要な役です」と言っている。

実説 明智光秀

いまの岐阜県可児の出身で、親は明智城主である。明智氏は美濃の守護であった土岐氏の分家で、はじめ美濃の斎藤道三に仕えた。光秀二十八歳(一五五六年)の時、道三はその子義龍と争い、光秀が道三に就いたことから明智城を義龍に攻められ、一族の多くは討死している。それ以降、光秀は明智家再興の志を持ちながら諸国を流浪、貧しい生活を強いられた。妻の熙子(ひろこ)は自分の黒髪を売ってまで日常の糧にしたという。当時の武将は側室を持つのが常であったが、光秀はひとりも持たず、彼女だけを愛していた。

三十五歳(一五六三年)の光秀は鉄砲の射撃に秀でていたことが買われ、越前の朝倉義景に抱えられた。三十八歳になった時、十三代足利将軍義輝が暗殺され、京を脱出した将軍の弟義昭が朝倉氏を頼ってきた。光秀はその側近細川藤孝と知り合い、藤孝を通じて義昭も光秀と懇意になった。

足利義昭は幕府再興を願っていたが、朝倉義景にその技量はないことを見て、その頃桶狭間の戦いで勢いに乗っていた織田信長に頼った。光秀はこうして義昭と行動をともにして信長の家臣となった。信長は義昭を奉じて上洛、十四代義栄を追いだし、義昭を十五代室町幕府将軍に擁立した。このことは結果として、信長の家臣であ

りながら、室町幕府の幕臣でもあるという特殊な関係に身を置くことになる。

荒んだ性格の者が多い織田家臣団の中で、光秀は詩歌、茶の湯をたしなむ教養人だった。朝廷との交渉役はうってつけで、信長に仕えて二年後には重臣四人の中に加わり、信長は彼を高く評価していた。

しかし信長の野望は大きく、反対勢力の台頭もあって、義昭は諸大名に信長にけん制するよう求めた。それによって浅井・朝倉が蜂起するとともに、本願寺、比叡山とも敵対するに至る。

一五七一年六月、姉川の戦いで織田軍は勝利、七月には光秀は信長から滋賀郡を与えられ、坂本城を持つことになった。

同年九月、信長の横暴さはエスカレートし、比叡山焼き討ちの暴挙に出た。幕府将軍義昭は幕府崩落の危機を悟り、信長包囲網を敷かんとしたが結局果たせず、一五七三年七月、織田の大軍に攻められ降伏、二百三十七年続いた足利幕府は滅亡した。

以後も信長の暴走は止まらず、「天魔」、「魔王」ともいわれるほどその残虐度は加速し、狂気すら帯び始める。

しかしこの時点でも、信長の光秀への高評価は続いていた、が、一五八二年五月、光秀を介して贈答を続けていた長曾我部元親に、信長は突然「四国征伐」を決定、光秀の立場はなくなる。さらに、臣下の斎藤利三を巡っての暴力沙汰、その上、家康が安土城を訪れた時の接待役を仰せつかっていた光秀、突然、岡山・高松城の救援を準備させる。その出陣命令で、「丹波、山城、坂本の領地を召し上げ、代って毛利の所領を与える」とあった。

五月二十八日、坂本城を出た光秀は愛宕神社に参詣、そのままそこに泊まって連歌の会を開いた。

光秀の発句はよく知られている。

「時は今 雨がしたしる 臯月かな」

「時」は「土岐氏」、「雨」は「天（あめ）」

出席者の歌も続く。

「水上まさる 庭の松山」・・・西の坊行祐(僧侶の最高位)

「水上（みなかみ）」は「皆の神(朝廷)」が活躍を「松(待つ)」

「花落つる 流れの末をせきとめて」・・・里村紹巴（連歌界の第一人者）

「花」は栄華を誇る信長 花が落ちる(信長が没落する)よう、勢いを止めて。

「風に霞を 吹きおくる暮」・・・大善院宥源(光秀の旧知)

信長が作った暗闇(霞)を、あなたの風で吹き払って暮（くれ）

六月二日、信長は一行百五十騎、小姓三十人ほどで本能寺に宿泊していた。光秀は重臣に信長を討つ決意を告げ、総勢一万三千の馬首が本能寺に向かった。多勢に無勢、勝敗は明らか、信長は炎上する本能寺奥の間で腹を切った。別働隊は二条御所を攻め、長男信忠を自害させた。

光秀は直ちに権力基盤を固めるため、各地諸侯に共闘を求める書状を送っている。中国攻めに没頭していた秀吉はこれを知り、直に毛利と和睦、十日後全軍を京都に戻した。

信長に反感を持つ諸将は多かったはずなのに、光秀に同調するものはなく、完全に孤立した。

十三日、秀吉の大軍の接近を察した光秀は京・山崎の天王山に防衛線を張ったが、すでに秀吉方に占領されていた。秀吉の軍は四方に満ち、光秀軍の将兵は一万六千、強い結束力で結ばれていた光秀軍は、一進一退の攻防を繰り返していたが、徐々に圧倒的な戦力差が光秀軍を追いつめ、最後には三方から包囲され壊滅した。

同日、深夜大雨の中、京都伏見の小栗栖の竹やぶ、十三騎で敗走中だった光秀は落武者狩りに出ている土民に竹槍で脇腹を刺され落馬、家臣に介錯を頼んで自害した。